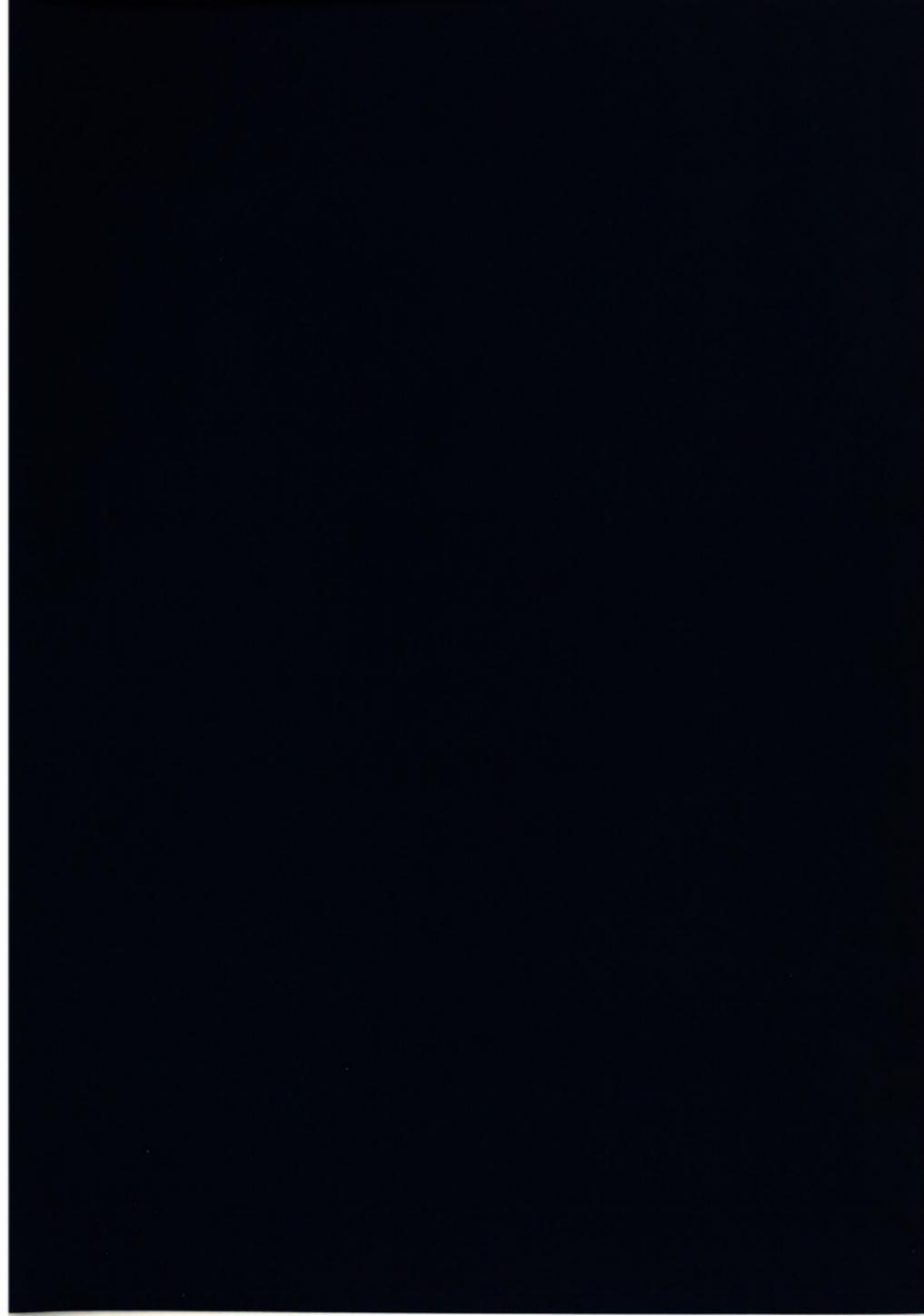


新伝寺遺跡91-1区・幡代遺跡03-3区 発掘調査報告書

泉南市文化財調査報告書 第43集

2004. 3

泉南市教育委員会



序

私たちの街、泉南市も近年の開発の増加に伴い、その姿を大きく変えようとしています。しかし、以前は耕作地のひろがる山間地帯で、今でも所々に往時の景観をとどめています。

この景観を形成する契機となったものとして、中世における荘園の発達があげられます。中世、さかんにおこなわれた耕作地の開発の様子は文献によりその一端を垣間見ることができます。市内に信達莊や吉見堀山莊などの荘園が存在していましたとされますが、具体的な範囲や、村の位置、人々の暮らしではわかつていません。

考古学の分野でも、市内における中世の集落は、確認例が少ないのが現状です。このたび報告します新伝寺遺跡および幡代遺跡では、中世の集落が確認されています。

耕地開発がさかんに行われた中世において、その主体である当時の人々が暮らす集落の様子を、考古学の立場から資料

文

提示することは、中世史を解明するうえで貴重な成果であります。また、現在我々が目にする景観が形成される過程を解き明かす、欠かすことのできない資料と考えます。

文末ではございますが、調査に際しご援助、ご協力、ご理解をいただきました近隣住民ならびに関係者の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後とも文化財保護行政にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年3月

泉南市教育委員会

教育長 梶本邦光

例

言

1. 本書は、泉南市教育委員会が行った新伝寺遺跡および幡代遺跡の発掘調査報告書である。①調査原因、②調査期間、③担当者、④調査時における地番、⑤調査面積(申請面積)は次のとおりである。

新伝寺遺跡91-1区

①大屋根店舗新築 ②平成3年7月29日～同年11月22日 ③岡田直樹
④北野385 ⑤4,600m²(32,382.35m²)

幡代遺跡03-3区

①老人福祉施設建設 ②平成15年5月8日～同年5月30日 ③河田泰之
④幡代3丁目44-49-127-1-129-130 ⑤4000m²(3,593.87m²)

2. 本書掲載の調査は、これまでに次の表記で報告書などに記載されている。

新伝寺遺跡91-1区

発掘調査 91-1区 泉南市教育委員会「泉南市遺跡群発掘調査報告書B」(1992)

幡代遺跡03-3区

発掘調査 03-3区 泉南市教育委員会「泉南市遺跡群発掘調査報告書X」(2003)
発掘調査 03-3区 泉南市教育委員会「泉南市遺跡群発掘調査報告書XXI」(2004)

3. 本書に掲載している新伝寺遺跡の調査成果は、次の文献で報告されている。本書の内容は、それを補完するものである。
泉南市教育委員会「新伝寺遺跡」「泉南市文化財年報No.1」(1995)

4. 本書の編集・執筆は河田が行った。

5. 調査における出土遺物および写真・図面の諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターで保管している。ひろく活用を望むものである。

凡

例

1. 本書で扱う基準高は、T.P. (東京湾平均海水位)である。

2. 遺構配置図および平面図には、国土地理院第VI系を用い、図上の方位はすべて座標北を表す。

3. 遺構名称は、SB - 握立柱建物、SD - 潟、SE - 井戸、SK - 上坑、SX - 不明土坑、PIT - ピット・柱穴としている。

4. 遺跡の略称は、次のとおりである。OKD - 岡田遺跡、OKDW

- 岡田西遺跡、OKDE - 岡川東遺跡、UJ - 氏の松遺跡、NWKW -

中小路西遺跡、NKN - 中小路北遺跡、NK - 中小路遺跡、NKS -

中小路南遺跡、BZ - 坊主池遺跡、BS - 仏性寺跡、ONS - 大苗

代遺跡、KT - 北野遺跡、KAI - 海会寺跡、HT - 幡代遺跡、HTS

- 幡代南遺跡。

5. 遺物実測図の断面は、須恵器 - 黒塗り、瓦器・瓦類・弥生土器・土師器・石器・石製品 - 白抜きとし、瓦器には遺物番号の横に「瓦」と表記している。

6. 本書における遺構名称は、幡代遺跡の次の遺構を除き調査当時のものを踏襲している。

SE02(本書)→SX12A(調査時)

SX12(本書)→SX12B(調査時)

7. 本書は、以下の編年に依拠した。

黒色土器・森 座「黒色土器」概説 中世の上器・陶磁器」(1995)。

土器器蓋・渋谷高秀「第4章 出土遺物の観察」[野田・藤並地区 発掘調査報告書]と歌山県教育委員会(1985)。瓦器・尾上 実・森島康雄・近江俊秀「瓦器」[概説 中世の土器・陶磁器](1995)。

須恵器すり鉢・森川 実「中世須恵器」[概説 中世の土器・陶磁器](1995)。

青磁・山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」[概説 中世の土器・陶磁器](1995)。

目 次

第1章 新伝寺遺跡91-1区の調査	1	第1節 既往の調査	12
第1節 既往の調査	1	第2節 稽序	13
第2節 中世造構面直上の包含層	2	第3節 道構と遺物	13
第3節 道構と遺物	4	第3章 まとめ	27
第2章 帰代遺跡03-3区の調査	12		

挿図目次

第1図 新伝寺遺跡周辺における既往の調査	1	第13図 調査区平面図	14
第2図 調査区平面図-1	3	第14図 調査区断面図	15
第3図 調査区平面図-2	4	第15図 II層出土遺物・Pit断面図	16
第4図 包含層出土遺物	5	第16図 Pit出土遺物	17
第5図 S D01出土遺物	6	第17図 S E01-02、S X02-06-09-10-12平・断面図	18
第6図 S K01-05-08-09-13-14-18-19-20出土遺物	7	第18図 S E01-02出土遺物	19
第7図 S K29出土遺物	8	第19図 S E02出土遺物	20
第8図 S K07-15、S X01-02出土遺物	9	第20図 S K04-05、S X01出土遺物	21
第9図 S X03-05-06出土遺物	10	第21図 S X02出土遺物	22
第10図 S B、Pit出土遺物	11	第22図 S X04出土遺物	23
第11図 S K29・S X06平面図	11	第23図 S X03-06-07-09出土遺物	24
第12図 帰代・帰代南遺跡における既往の調査	12	第24図 S X10-11-12出土遺物	25

表目次

第1表 新伝寺遺跡周辺における既往の調査	2	第3表 新伝寺遺跡出土土器類の種類別・用途別破片数	28
第2表 帰代・帰代南遺跡における既往の調査	13	第4表 帰代遺跡出土土器類の種類別・用途別破片数	28

図版目次

図版1 新伝寺遺跡91-1区垂直写真	図版9 帰代遺跡03-3区全景
図版2 新伝寺遺跡91-1区全景	図版10 帰代遺跡03-3区S X02-05-06-07
図版3 新伝寺遺跡91-1区S D01-06、S K07-08	図版11 帰代遺跡03-3区S X01-04-09-10
図版4 新伝寺遺跡91-1区S K29	図版12 帰代遺跡03-3区S E01-02
図版5 新伝寺遺跡91-1区S X02-03周辺	図版13 帰代遺跡03-3区ピット断面
図版6 新伝寺遺跡91-1区出土遺物①	図版14 帰代遺跡03-3区出土遺物①
図版7 新伝寺遺跡91-1区出土遺物②	図版15 帰代遺跡03-3区出土遺物②
図版8 帰代遺跡03-3区周辺	図版16 帰代遺跡03-3区出土遺物③

第1章 新伝寺遺跡91-1区の調査

第1節 既往の調査(第1図・第1表)

ここでは、周辺遺跡における既往の調査を概観する。対象とするのは、樫井川左岸下流域の氏の松遺跡、岡田遺跡、岡田西遺跡、岡田東遺跡、中小路遺跡、中小路西遺跡、中小路北遺跡、中小路南遺跡、坊主池遺跡、大苗代遺跡、北野遺跡、仏性寺跡、海会寺跡である。第1表および第1図は平成14年度までの調査成果をまとめたもので、それぞれ報告書に依拠した地区名であらわしている。また、第1表は遺構もしくは遺物が確認された調査区のみ掲載している。

樫井川左岸下流域では、中世以降の遺構や遺物が大半を占める。集落跡は、現在のところ弥生時代前期、古墳時代後期、平

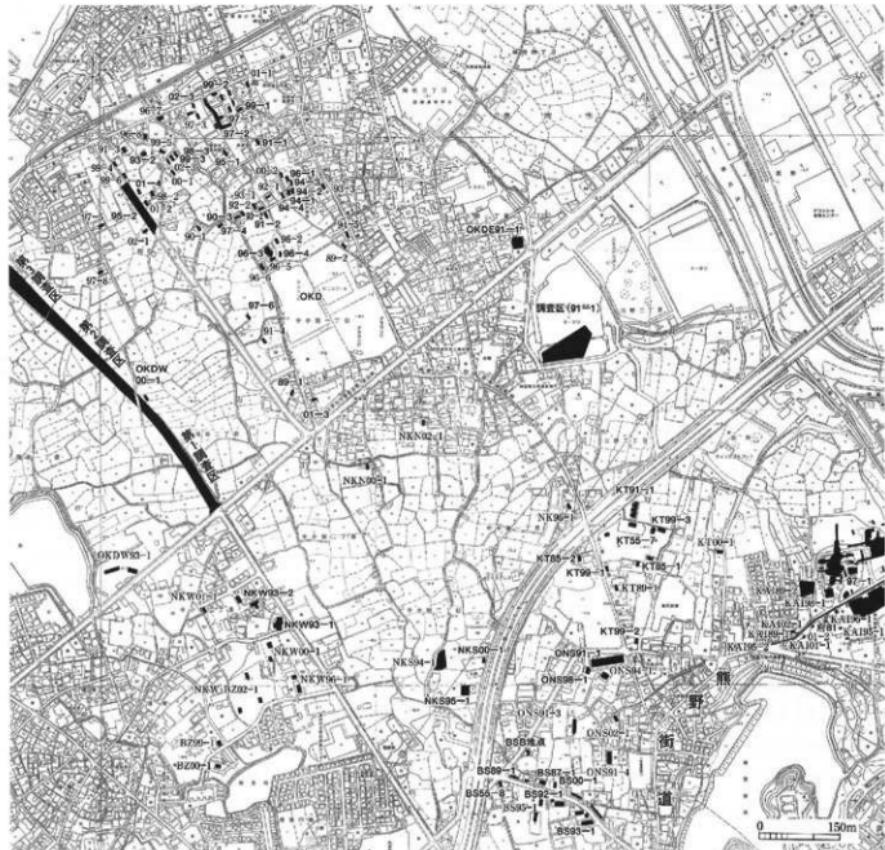
安時代のものが確認されている。

縄文時代の明確な遺構は確認されていない。早期後半および後期の土器と有舌尖頭器が岡田東遺跡(91-1区)で、晚期の土器が岡田西遺跡(第1～3調査区の試掘調査)^①で、石器が岡田遺跡(90-3区)で確認されている。

弥生時代では、氏の松遺跡(第3調査区)で前期の掘立柱建物で構成される集落が確認されているほか、後期の土坑が岡田東遺跡(91-1区)で確認されている。

古墳時代では、岡田東遺跡(91-1区)で後期の掘立柱建物や堅穴住居が確認されている。

飛鳥時代には海会寺が建立され、その東隣に建立豪族の居



第1図 新伝寺遺跡周辺における既往の調査

第1章 新伝寺遺跡周辺における既往の調査

遺構もしくは遺物が確認された調査区のみ掲載している。表中の調査区は、第1回でゴチックで表記している。

館とされる掘立柱建物が7世紀代から営まれる。これらは9世紀代まで継続して営まれる。海会寺跡に関連するものでは、瓦窯や粘土採掘土坑(89-2区)なども確認されている。

平安時代の集落が、北野遺跡(55-7-91-1-99-3区)で確認されている。このうち、91-1区で確認された掘立柱建物は棟行5~7間以上と規模が大きい。このほか、仏性寺跡(55-8区)で土坑、海会寺跡で掘立柱建物が確認されている。包含層は仏性寺跡(55-8区)、北野遺跡(99-3区)で確認されており、遺構の確認された調査区と重複する。なお、海会寺跡北側の道路は熊野街道に比定されており、付近には櫛戸王子があったとされる。

鎌倉時代から室町時代の遺構および遺物は、前代に比べ数量・範囲とも増大する。ただ、現在確認されている遺構のうち、ピットは大蔵地遺跡(91-1区)で平安時代末から鎌倉時代、岡田遺跡では97-1区で室町時代、91-1・2区で中世のものが確認されているが、明確な掘立柱建物など集落として認識されているものではなく、耕作痕や、灌溉用の井戸や水路と考えられるものばかりである。

中世の包含層が確認された調査区が密集する区域がいくつある。このうち包含層の分布から、未確認の集落跡が存在する可能性が考えられるのは、耕作痕や灌漑水路と考えられる溝が検出されていない岡田遺跡91-2区周辺である。

耕作痕や灌漑施設と考えられる遺構は、広範囲で確認されている。岡田西遺跡および氏の松遺跡の第1・2・3調査区周辺、岡田遺跡95-2区周辺、中小路西遺跡93-1区周辺である。明確な時期が判明しているものは少ないが、それらが機能し

た時期はおおむね13世紀代以前・13世紀代から14世紀初頭・14世紀末から15世紀初頭にわかれれる。

中世における寺院跡が海会寺跡と仏性寺跡で確認されている。海会寺跡では12世紀後半から14世紀代にかけて、古代の寺院跡に重複した位置に堂舎の存在が確認されている。仏性寺跡(55-8-87-1区)では、遺構は未確認であるものの平安時代から鎌倉時代の軒瓦が確認されている。

第2節 中世造構面直上の包含層(第2図)

まず、後世の削平による造構面への影響の程度を想定したい。調査区全体に深さ10cm程度の溝状の擾乱(以下、「溝状造構」と表記)がみられ、造構および包含層とも削平を受けているからである。

調査区に設定したグリットにもとづき、遺物が出土した包含層の分布をみると、包含層が完全に削平されていないグリットは、5m四方のグリット総数162のうち38、約23%。割合からみると包含層の遺存状況はわるいが、包含層がみられたグリットの分布をみると、遺構の密集している箇所に集中している(第2図のトーンの箇所)。

今回の調査で検出した遺構のうち、ピットはおむね検出面から遺構底面まで10~30cm程度である。市内における中世の掘立柱建物の柱穴と比べると、本調査区で確認したピットは極端に浅いわけでもない。

これらのことから、後世の削平は、おむね包含層直下付近までで、遺構面まで削平が及んだのは一部に過ぎず、検出した遺構のうち包含層が遺存していた箇所のものは、遺構面自体は削平されておらず、溝状遺構に部分的に削平されているも



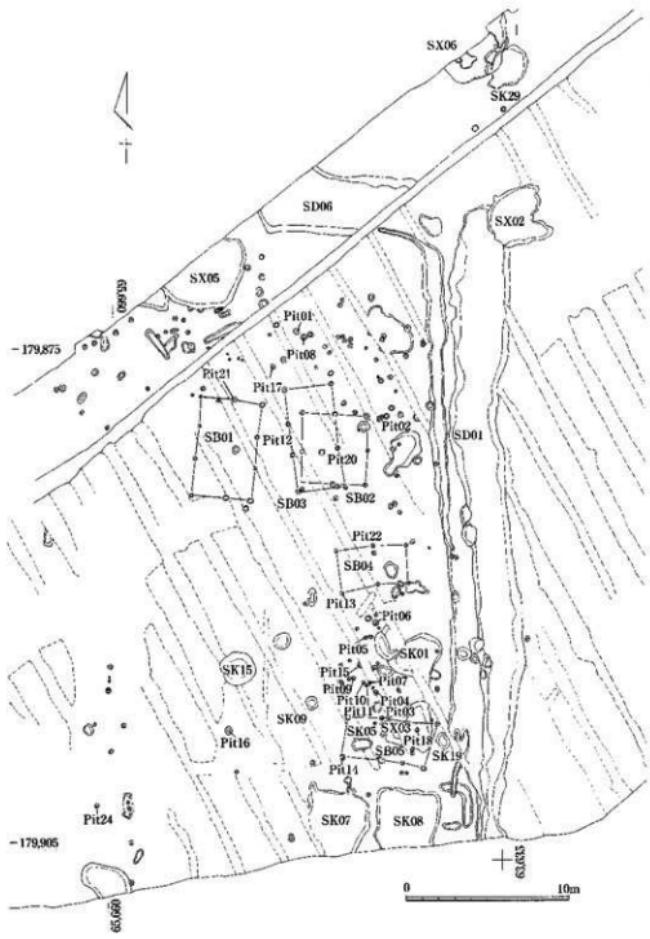
第2図 調査区平面図-1

のと考えたい。

次に包含層の出土遺物から造構の年代の上限を考えたい。

造構面直上の包含層からは、瓦器椀(1～5)・皿(6・7)、青磁

(8・9)、土師器皿(10～13)、軒丸瓦(14)、平瓦(15)、土師器



第3図 調査区平面図-2

土鉢(16~19)、須恵器飯蛸壺(20)、弥生土器壺(21)、石鉢(22~23)などが出土している。1~4はIV-2期まで。8は龍泉窯系青磁碗I-4aか。調査区で確認した遺構は、13世紀後半以前の年代が想定できる。

第3節 遺構と遺物

1. 溝

SD01(第3~5図、図版1~3)

検出長約40m、最大幅約6m、深さ最大約1m。遺構底面は「W」状になっている箇所があり、掘り返しの痕跡とも考えられる。遺構の北端はSX02付近であるが、西側に同程度の

幅をもつSD06がある。SD06は出土遺物はなく時期は不明であるが、東へ延長するとSD01と直交することから、両遺構は同一の規格をもとに掘削された溝と理解でき、一連の遺構であった可能性が考えられる。埋土は上層と下層にわかれる。

上層からは、瓦器碗(24~29)・甕(37)、土器器碗(30)・皿(31~32)・笠(38)、須恵器すり鉢(33~34)、平瓦(35~36)が出土している。35は凹面に模骨状の圧痕がみられ、凸面にはハナレ砂の痕跡がこのこと。24~26はIV-1~2期、13世紀後半か。

下層からは瓦器碗(39~42)・笠(43~44・46)、土器器皿(47)・土鉢(48)・真蛸壺(49)などが出土している。39~40はIII-3期。45はII-2段階、13世紀前半か。

SD01が埋没した年代は、13世紀後半以降と考えられる。各層位の出土遺物の年代差があまりないことから、集落の営まれた期間は、短期間であったと想定できる。

2. 土坑

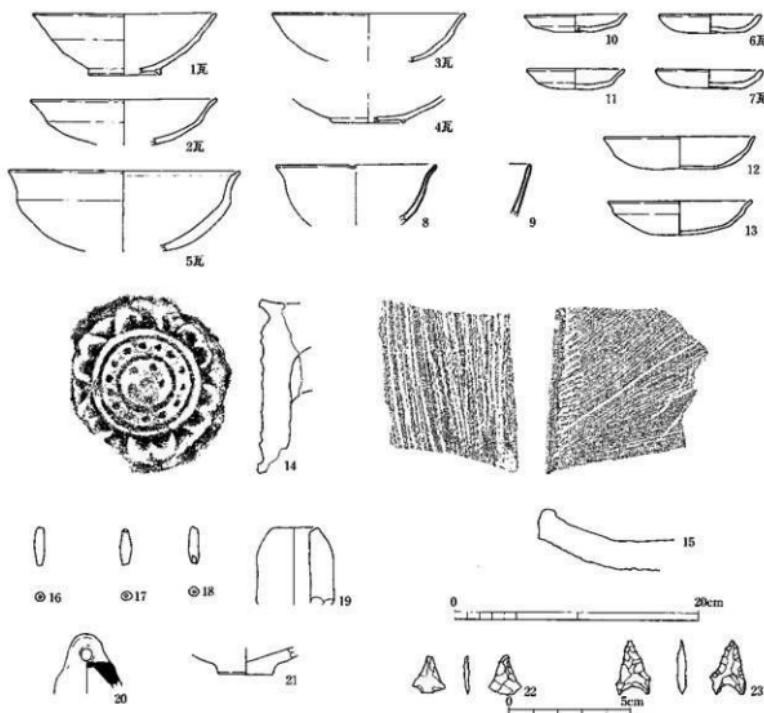
調査でSK(土坑)およびSX(不明土坑)として扱った遺構のうち、遺物が出土したもののみを以下に概観する。

SK01(第3~6図、図版1~3・5・6)

径約3m、深さ約15cm。溝状遺構に中央部が、ほかの土坑に北西部がそれぞれ切られている。切り合ひ関係のみられる土坑から出土物は出土していない。瓦器碗(50)・皿(51)・笠(52)、須恵器杯(54~55)・甕(53)などが出土している。50はIV-1~2期、13世紀後半か。

SK05(第3~6図、図版1~3・5・6)

長径約1.5m、深さ約10cm。溝状遺構に一部切られている。遺構底面には径10cm程の縛がみられる。瓦器碗(56~57)・皿(58)などが出土している。56はIV-1~2期、13世紀後半か。



第4図 包含層出土遺物

・SK07(第3・8図、図版1～3・5・6)

径約5m、深さ約10cm。平面形がいびつで、溝状造構に西側が切られている。5cm程度の縁が密集しており、直線的に並んでいるようにみえる箇所がある(図版3の中段)。瓦器碗(89～93)・皿(94・95)・土師器皿(96～100)・真蛸壺(103・104)・青磁碗(101・102)などが出土している。89～91はIV-1～2期、13世紀後半か。101は、龍泉窯系青磁碗I-5b類、13世紀前半か。

・SK08(第3・6図、図版1～3・5・6)

一辺約5m、深さ約10cm。瓦器碗(59・60)・土師器碗(61)などが出土している。60はおむねIII-3期まで、13世紀前半以前か。

・SK09(第3・6図、図版1～3・5・6)

径約0.8m、深さ約30cm。瓦器碗(62～64)などが出土している。63・64はIII-3期、13世紀前半か。

・SK13(第2図、図版1～3・6)

径約4.5m、深さ約10cm。一部に15cm程度の縁がみられる。瓦器碗(65)・土師器皿(66)・須恵器壺(67)・陶器壺(68)・平瓦(69)

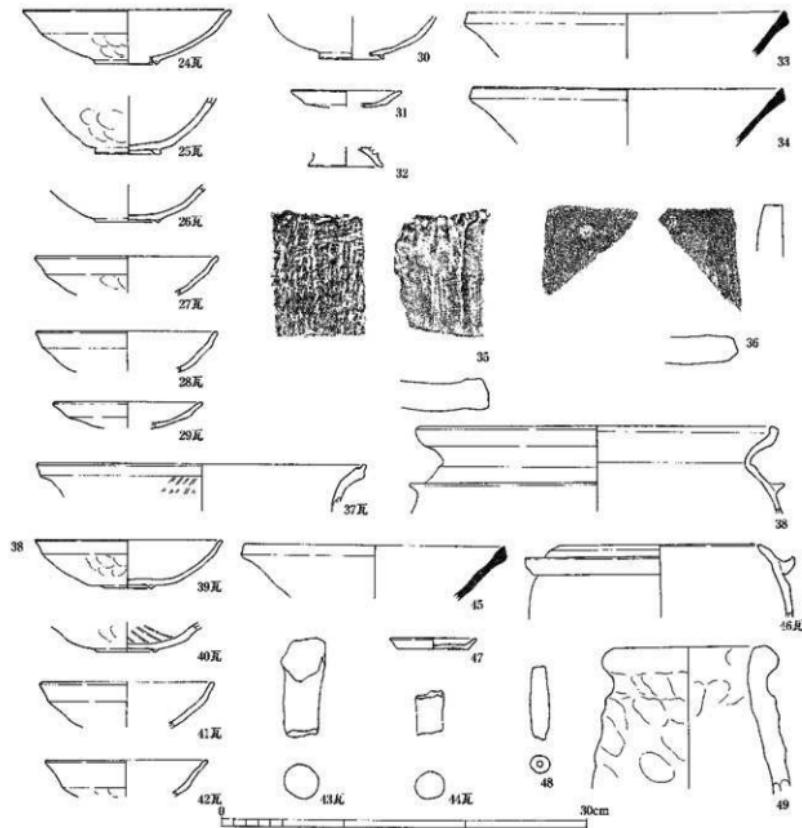
などが出土している。68は、胎土が茶褐色、外面に緑色釉が一部にみられる。内面に幅3cm程度の粘土縫の接合痕がこる。常滑焼か。65は、III-2～3期、13世紀前半か。

・SK14(第2・6図、図版1～3・6)

径約4m、深さ約10cm。瓦器碗(71)・土師器皿(70)・須恵器すり鉢(72)・製塙土器(73)・土師器高杯(74)などが出土している。71はおむねIV期、72はII-2段階、13世紀代か。

・SK15(第3・8図、図版1～3・6)

径約2.5m、深さ約70cm。溝状造構に一部切られている。瓦器碗(105)・皿(106)・壺(110)・土師器皿(107・108)・須恵器すり鉢(112)・灰釉鉢(113)・陶器鉢(111)・青磁碗(109)・平瓦(114・115)などが出土している。109は、龍泉窯系青磁碗I-4類、12世紀後半か。111は胎土が茶褐色で内外面とも横方向のナデがみられる。常滑焼のすり鉢か。113は、胎土が灰白色で内外面には横方向のナデ、貼り付け高台で体部高台付近に横方向のヘラ削りが見られる。内面および外面部口縁付近に施釉。内面底部に釉薬のはがれた箇所がみられることから、すり鉢として使



第5図 SD01出土遺物

用されたのであろうか。115は、凸面に繩タタキ、ハナレ砂がみられる。105はIV-2期、13世紀後半か。

・SK18(第2・6図、図版1~3・6)

長径約1.7m、深さ約15cm。瓦器碗(75)、土師器皿(76~79)などが出土している。75はIV-1~2期、13世紀後半か。

・SK19(第2・6図、図版1~3・6)

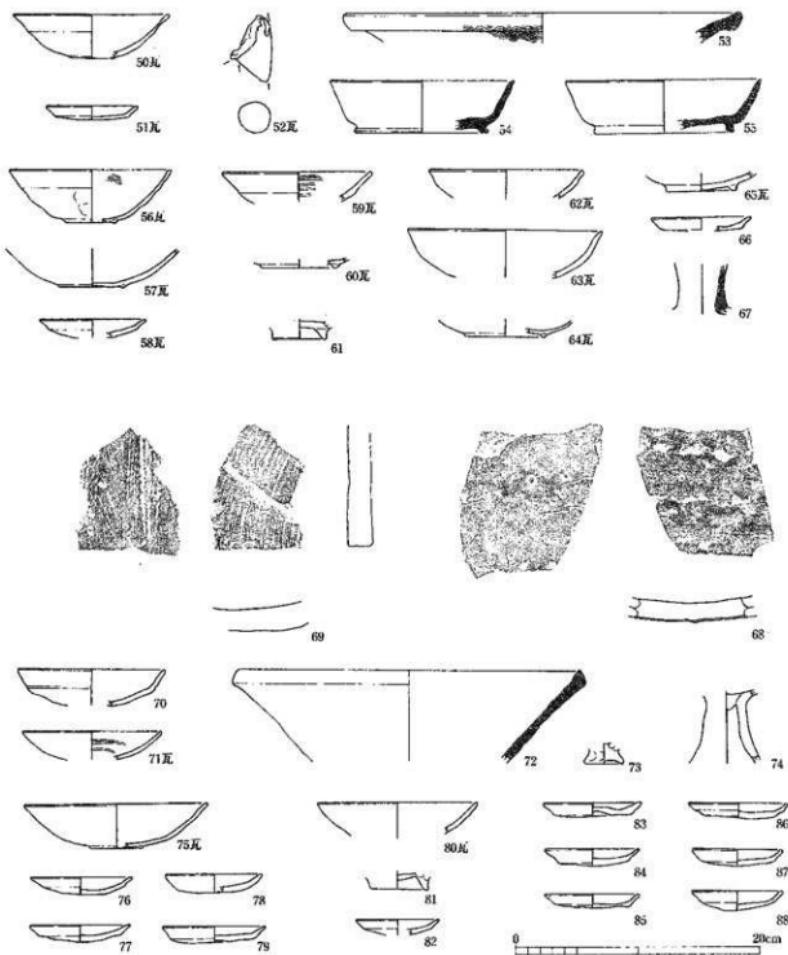
長径約1.2m、深さ約10cm。瓦器碗(80)、土師器碗(81)、土師器皿(82)などが出土している。80は、IV-1~2期、13世紀後半か。

・SK20(第2・6図、図版1~3・6)

長径約1m、深さ約30cm。土師器皿(83~88)が出土している。

・SK29(第3・7・11図、図版1~4・7)

長径約3.5m、深さ約20cm。遺構底面には粘土が貼られ、被熱により赤変していた。埋土には炭が混じり、土師器真蛸壺が大量に出土した。これらのことから、真蛸壺の焼成土坑と考えられる。平面検出の状況から、SX06に先行すると考えられる。真蛸壺(116~121)は、破片数にして1275点、重量が67.5kg。完形品1個体の重量は約2.5kgであるから、27個体分の破片が出土したことになる。ヘラ記号が4種類以上あることが確認できた。ヘラ記号のある破片は23点で、「○」(第7図121)が7点、「○」(第7図120)が10点で、そのほか全体が判明しないヘラ記号2種(6点)ある。このほか、陶器すり鉢(122)、土師器釜(123)、平瓦(124)などが出土している。122は、茶褐色の胎土で、内面には1単位7条のおろし目がみられる。備前焼か。SK29付近は、遺構面直上の包含層の遺存状況が悪い箇所(第2図)



第6図 SK01・05・08・09・13・14・18・19・20出土遺物

であるが、切り合ひ関係からSK29より後出するSX06で、13世紀代の紀伊産土師器釜(第9図161~163)が出土していることから、遣柵の廃絶年代はおおむね13世紀代と考えたい。122は混入と判断したい。

・SX01(第2・8図、図版1~3・6)

径約2m、深さ約1.2m。SD05に縁がっており、両者の切り合ひ関係は不明である。検出状況からみると、SX01が井戸で、SD05がそれに取りつく水路とも考えられる。瓦器甕(125・126)、陶器甕(127)、須恵器すり鉢(128)、平瓦(131)などが出土

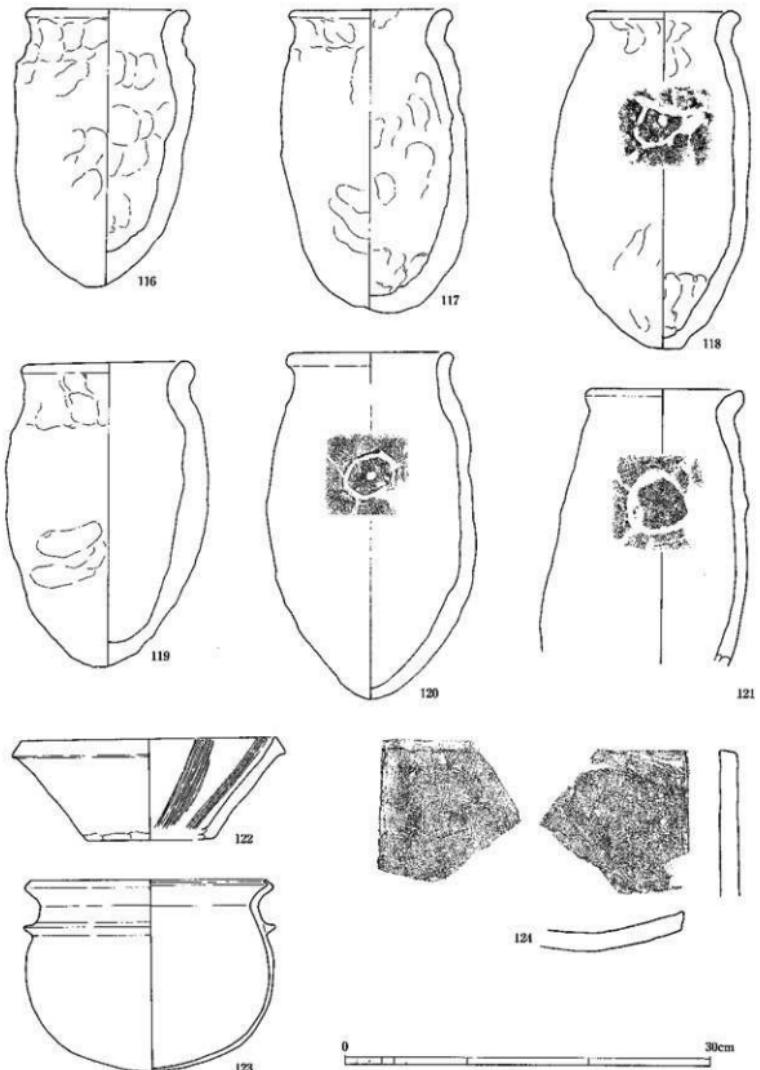
している。131は凹面に糸切り痕、凸面にハナレ砂がのこる。

128はII~2段階、12世紀末から13世紀初頭か。

・SX02(第3・8図、図版1~3・5・6)

径約4m、深さ約10cm。平面的な検出状況からSD01を切っていると考えられる。陶器甕(129)、須恵器甕(130)、平瓦(132)などが出土している。129は、胎土が茶褐色で外面のみ還元色を呈する。内面には幅5cm程度の粘土層の接合痕がみられる。常滑焼か。132は凹面に糸切り痕、凸面にハナレ砂がのこる。

・SX03(第3・9図、図版1~3・5・6)



第7図 SK29出土遺物

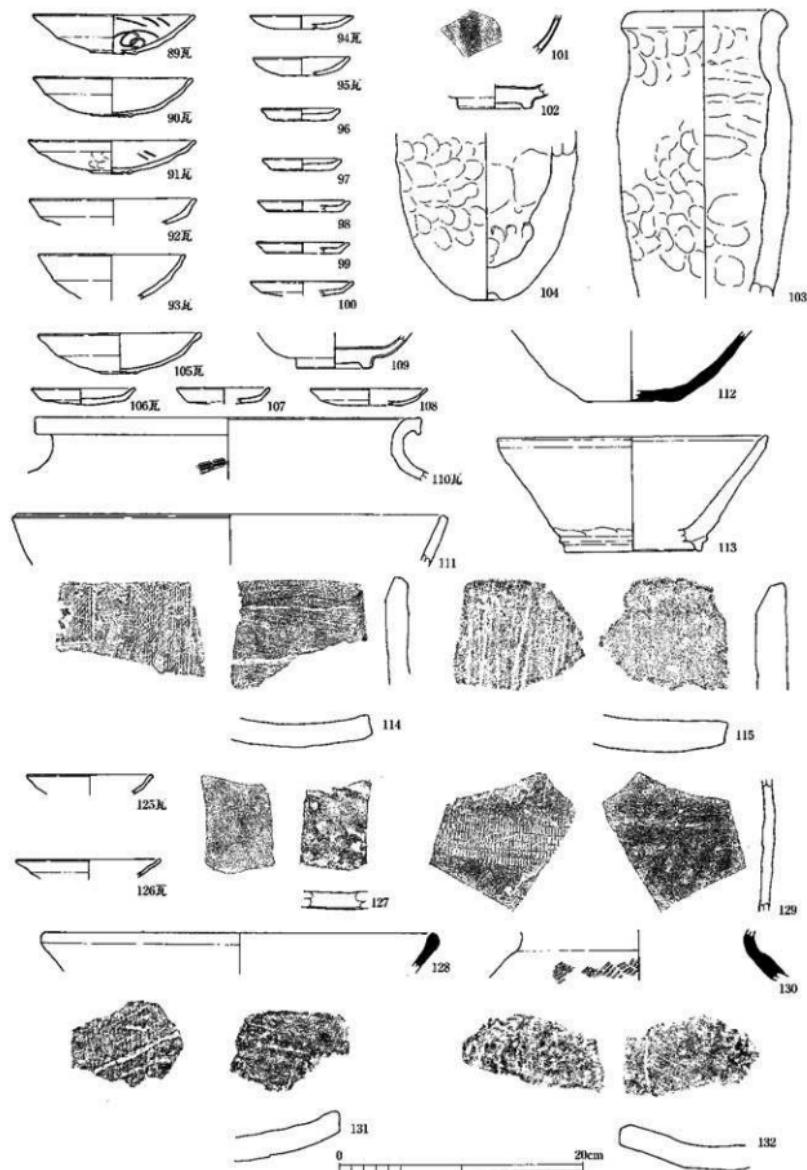
径約3.5m、深さ約10cm。遺構中央を構造遺構に切られている。ピットが遺構底面や遺構に隣接してみられるが、切り合い関係は不明。瓦器 梗(133～135)・皿(136)、土師器 皿(137～139)・釜(141)、真蛸壺(142・143)、平瓦(140)などが出土している。140は凹面に糸切り痕、凸面にハナレ砂がのこる。133はIV-1期、13世紀中頃か。141は13世紀代か。

・SX05(第3・9図、図版1～3・6)

径約6m、深さ5cm。5cm程の砾が密集した箇所がみられる。瓦器 梗(144～152)・皿(153・154)・釜(160)、土師器 皿(155～158)が出土している。144はIV-2期、13世紀後半か。

・SX06(第3・9図、図版1～3)

径約6m、深さ約10cm。平面検出の状況から、SK29に後出す

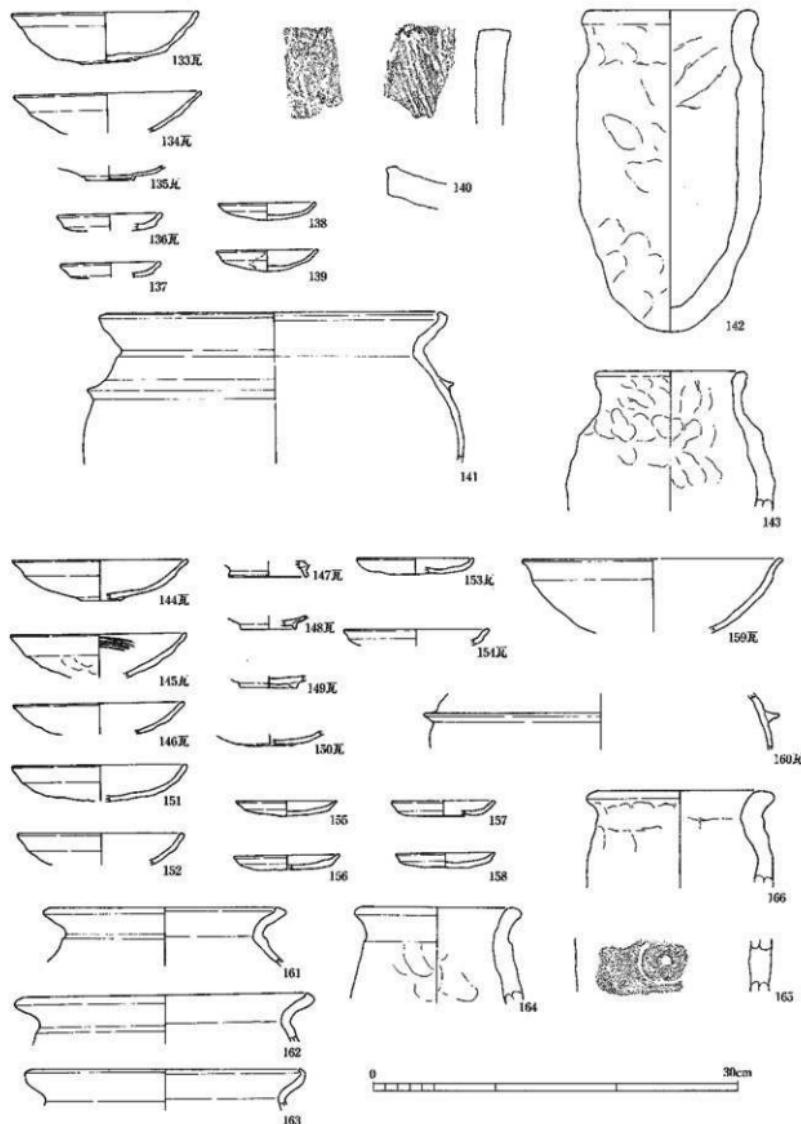


第8図 SK07-15、SX01-02出土遺物

3. 握立柱建物とピット

確認したピットは約200基。分布に偏りがあり、調査区中央のSD01の西側に集中している。規模は、径5~10cm、深さ10~

ると考えられる。遺物が出土したのは、遺構北東端の縁が密集して確認された箇所である。土師器釜(161~163)・真蛸壺(164~166)が出土している。161~163は、13世紀代か。



第9図 SX03-05-06出土遺物

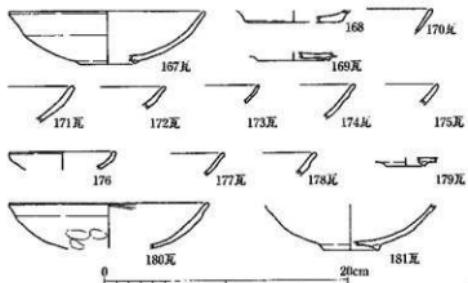
30cm程度である。遺物が出土したピットは26基。いずれも、瓦器など中世の遺物が出土している。このうち、平面的な配置のみから掘立柱建物と想定したのは、次の5棟である。

・SB01(第3・10図、図版1~3)

3間(約6m)、2間(約4m)で、面積約24m²。Pit21から土師器皿(168)が出土している。

・SB02(第3図、図版1~3)

2間(約4m)、2間(約4m)で、面積約16m²。出土遺物はな



第10図 SB、Pit出土遺物

い。

・SB03(第3・10図、図版1～3)

3間(約6m)、1間(約3m)で、面積約18m²。Pit12-20から瓦器窓が出土している。167はPit20から出土した。IV-1期、13世紀中頃か。

・SB04(第3・10図、図版1～3)

2間(約4.5m)、1間(約3m)で、面積約13.5m²。Pit13-22から、瓦器窓が出土している。Pit22から瓦器窓(170)が出土した。

・SB05(第3・10図、図版1～3)

3間(約6m)、1間(約3m)で、面積約18m²。Pit03から土師器真蛸座、Pit14から器種不明の瓦質土器が出土している。

・そのほかのピット(第3・10図、図版1～3)

このほか、図示している遺物は、土師器皿(Pit08-176)、瓦器窓(Pit01-169-171, Pit04-172, Pit06-173, Pit08-174-175, Pit16-177-178-180, Pit17-181, Pit23-179)である。167-169-181はⅢ-3～Ⅳ-2期まで、13世紀代か。

注記

- ① 京都市教育委員会「位置と環境」「市道市場園田線新設に伴う岡田西・氏の松道跡発掘調査報告書」(1995)
- ② 京都市教育委員会「南寺」(1987)
- ③ 京都市教育委員会「奈良寺跡発掘調査報告書－歴史文化財センター建設に伴う瓦窯の調査－」(2000)
- ④ と同上。
- ⑤ 大阪府教育委員会「熊野・紀州街道 論考編－歴史の道調査報告書第1集－」(1987)
- ⑥ 京都市教育委員会「男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ」(1981)
- ⑦ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書Ⅲ」(1986)
- ⑧ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書Ⅴ」(1988)
- ⑨ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書Ⅺ」(1990)
- ⑩ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書Ⅻ」(1992)
- ⑪ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書Ⅹ」(1993)
- ⑫ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書Ⅺ」(1994)
- ⑬ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書ⅩⅢ」(1995)
- ⑭ 京都市教育委員会「市道市場園田線新設に伴う岡田西・氏の松道跡発掘調査報告書」(1995)
- ⑮ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書ⅩⅣ」(1996)
- ⑯ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書ⅩⅤ」(1997)
- ⑰ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書ⅩⅥ」(1998)



第11図 SK29・SX06平面図

- ① 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書ⅩⅣ」(1999)
- ② 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書ⅩⅤ」(2000)
- ③ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書ⅩⅥ」(2001)
- ④ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書ⅩⅦ」(2002)
- ⑤ 京都市教育委員会「共同住宅建設に伴う大蔵遺跡発掘調査報告書」(2002)
- ⑥ 京都市教育委員会「京都市道跡発掘調査報告書ⅩⅧ」(2003)
- ⑦ 京都市教育委員会「店舗建設に伴う北野道跡発掘調査報告書」(2003)

第2章 幡代遺跡03-3区の調査

第1節 既往の調査(第12図、第2表、図版8)

ここでは、幡代遺跡および幡代南遺跡における調査成果を概観する。第2表および第12図は平成14年度までの調査成果をまとめたもので、それぞれ報告書などに依拠した地区名であらわしている。なお、大阪府教育委員会および(財)大阪府埋蔵文化財協会が行った調査区は、調査成果を掲載している他の報告書や調査年度をもとに任意の記号を付した。また、第2表は遺構もしくは遺物が確認されている調査区のみ掲載している。

現在のところ、両遺跡における調査では、平安時代・鎌倉時代から室町時代・近世の遺構および遺物が多く確認されている。それ以前の遺構および遺物は少なく、绳文時代晚期から弥生時代前期と弥生時代中期前葉の河道(HTS府協会93)と石包丁が出土した落ち込み(府協会93)のみである。

平安時代後期の集落が、現在の幡代集落の東側で確認されている。92-1区では掘立柱建物や溝、土坑が確認されている。

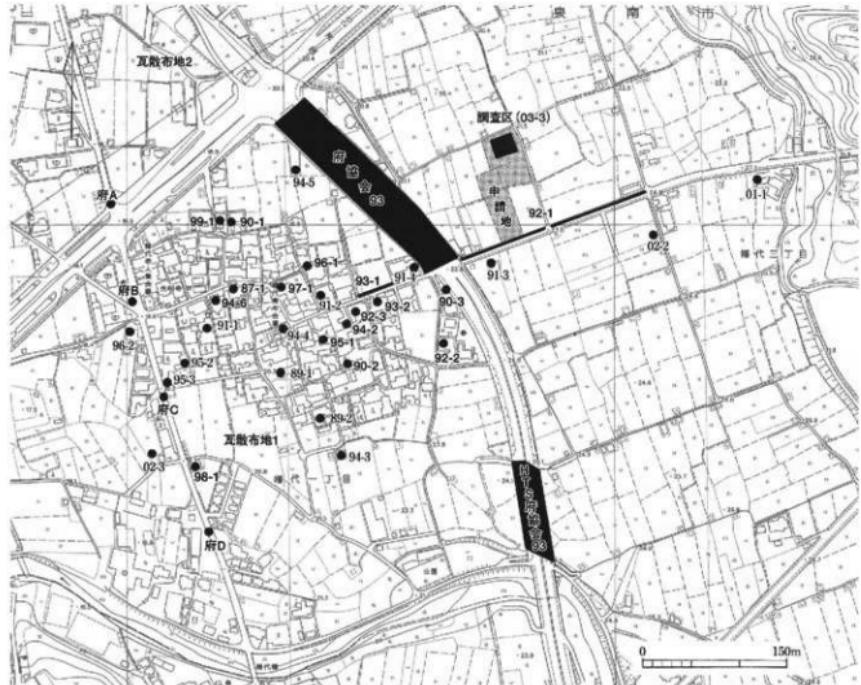
このほか、中世以前の遺構では、ピットや落ち込み(90-1区)、溝(87-1区)が確認されている。

鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物が、現在の幡代集落の東西両側において確認されている。東側では、掘立柱建物と井戸(府協会93)、西側では規模は不明であるが掘立柱建物と考えられる柱穴(府A・府B・府C)が確認されている。

このほか、平安時代から室町時代にかけての瓦が遺跡南西部で採集されている(瓦散布地1)。同様の瓦の散布地は、遺跡の北側約300mの里里遺跡内にも確認されている(瓦散布地②)。このうち、瓦散布地2付近では、発掘調査の出土遺物と小字名から安狹寺の存在が指摘されている。

近世の遺構は、現在の幡代集落内(94-2-6区、95-1区、93-1区)で確認されている。いずれも土坑などであるが、94-6区では、瓦を転用した土製円盤や泥面石、93-1区では製糖に用いる「瓦築」^{とうろ}が確認されている。

遺跡東側の耕作地は、条里地削状の区画が確認できるが、幡



第12図 幡代・幡代南遺跡における既往の調査

第2表 構造・機械南遺跡における既往の調査

層	地区	遺構	時代	君情高土造物	由・高層地盤の区分	底	造形	層	遺構	時代	造形高土造物	地盤・表面剥離との関係
II T	府 A	柱穴	平安時代後期から 奈良時代後期	-	平安時代後期から 奈良時代後期	3 HT	92-2	包含層	?	上層部	-	9
II T	府 B	柱穴	平安時代後期から 奈良時代後期	-	平安時代後期から 奈良時代後期	3 HT	92-3	土壤	-	-	-	9
II T	府 C	柱穴	平安時代後期から 奈良時代後期	-	平安時代後期から 奈良時代後期	3 HT	93-1	落ち込み	18世紀後半から 19世紀前半	陶磁器・瓦礫	-	10
II T	府 D	包含層	平安時代後期から 奈良時代後期	-	平安時代後期から 奈良時代後期	3 II T	93-2	-	-	土器	-	9
HT	府協会90	落ち込み	春秋時代中期	石室下	君情高土造物	4 II T	94-2	ピット・土坑	近世以降?	瓦・陶磁器	-	11
HT	府協会93	獨立柱建物・井戸	縄文時代から奈良時代	-	-	4 II T	94-6	土壤	近世以降	瓦面子・土器内面	-	12
HT	瓦敷布石	-	平安時代から奈良時代	瓦	-	5 II T	95-1	土壤	近世以降	陶磁器	-	13
HT	瓦敷布石	-	平安時代から奈良時代	瓦	-	5 II T	95-1	落ち込み跡の跡地	-	陶磁器	-	14
II T	87-1	溝	中世以前	-	中世	5 HT	97-1	包含層	中世	-	-	14
HT	90-1	ピット・落ち込み	中世以前	-	中世	6 II T	98-1	耕作地盤界	-	-	-	15
HT	90-2	落ち込み・ピット	中世以前	土器	中世	6 HT	99-1	井戸	元代	古代の瓦	-	16
HT	90-3	包含層	中世	瓦・土器	-	7 HTS	99-3	河床	平安時代後期～ 奈良時代後期・中 期建物	中世末～近世初期	-	17
II T	92-1	獨立柱建物・窓・土坑	平安時代後期	瓦器・土器	-	8 HTS	府協会93	井戸・窓・暗窓	中世末～近世初期	-	-	17
II T	92-1	溝・土坑・落ち込み	平安時代後期以降	-	地形構造が平安時代後期	8						

遺構もしくは遺物が確認された調査区のみ掲載している。表中の調査区は、第12回でゴリラで表記している。

代南遺跡の発掘調査(HTS府協会93)で中世末から近世初頭のものであることが確認されている。

第2節 層序(第13~15図、図版9~11・14)

ここでは調査区における層位と、確認した遺構および遺物について概観する。なお調査は、機械掘削でI層のすべてとII層の大半を除去し、III層上面のみで遺構検出を行った。このため、II層の出土遺物を厳密に取り上げることができず、検出した各遺構のうちII層をベースとする遺構は本来の平面プランを確認できていない。よって、遺構検出面を把握できない遺構がいくつかある。

I層 繁作土。調査に先立ち、滋土は事前に除去しているので、示示しているものは床土にある。黄橙色シルトと褐灰色シルトからなり、それぞれ分布範囲が異なる。黄橙色シルト(第14図1・2層)は調査区全体にみられるが、褐灰色シルト(第14図3層)は、調査区北西部のみにみられる。機械掘削で除去したため、出土遺物は確認できなかった。

II層 中世の包含層で上面が遺構面である。疊混じり赤灰色シルト(第14図4層)からなり、調査区東南部にのみ分布する。自然堆積と考えられる。調査区東壁断面(第14図)をみると、検出した遺構には遺構面がII層上面のものがあることがわかる。なお、II層のほとんどを機械掘削で除去したため、出土遺物はII層上面の遺構のものかII層のものかを明確に区別して取り上げることができなかった。

瓦器窓(182~183)、土器窓(184~188)・釜(189)・土鍤(191)・真珠窓(192)、須恵器すり鉢(190)、平瓦(193)、陶器窓(194)が出土している。194は体部外面にナデ、底部付近にヘラ

状工具による圧痕がみられ、底部外面には砂粒が付着している。茶褐色の胎土、常滑焼か。193は凸面にハナレ砂がのこる。192は体部外面に焼成前にヘラ状工具による記号が刻まれている。182はIV-1~2期、13世紀後半か。II層は、出土遺物から13世紀後半以降の堆積と考えられ、II層上面で検出した遺構は13世紀中後半以降、II層直下で検出した遺構はそれ以前の年代が想定できる。

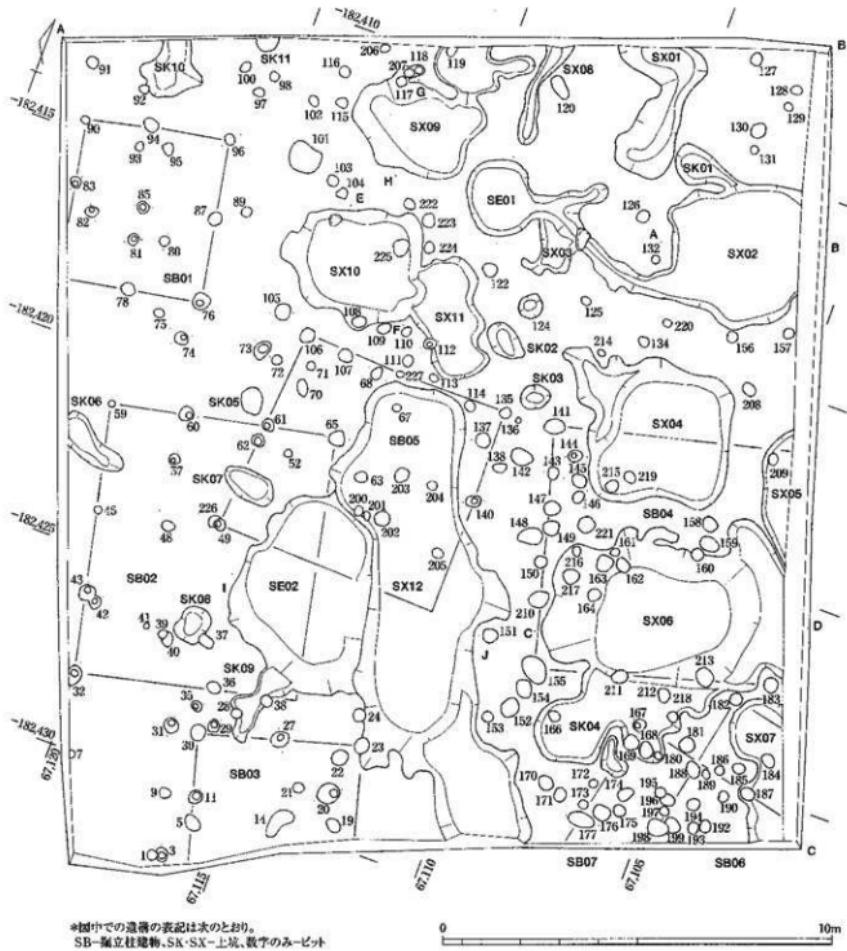
III層 中世の遺構面。明黄褐色粘土からなり、一部に5cm以下の礫が混じる箇所がある。今回の調査は、III層上面までであったため地山であるかどうかは不明。なお、府道新設に伴う調査では、III層と同様の層位の直下で遺構面を確認しており、石包丁が出上した落ち込みが確認されている。このことから、III層直下に遺構面が存在する可能性はある。今回の調査では、III層上面でピットや井戸、土坑などの遺構を確認した。なお、これらの遺構には、II層上面が遺構面である遺構も含まれている。

第3節 遺構と遺物

1. 獨立柱建物とピット(第13~16図、図版9・13)

確認したピットは225基。調査時、理土から暗灰色シルトと炭混じり黄灰色シルトにおおまかに分類したが、理土の違いや出土遺物から、時期差や掘立柱建物などの遺構の単位は認識できなかった。

ピットには、柱痕をもつもの(Pit03-11-20-27-29-31-32-35-42-43-49-57-60-61-62-81-82-83-85-112-140-144-167)、柱痕をもち遺構底面に根石状の砂岩がみられるもの(Pit74)、柱痕をもたず遺構底面に根石状の砂岩がみられるもの(Pit



第13図 調査区平面図

96・105・137・143・177)、柱頭をもたず造構底面に砂岩がみられるが上面は平坦ではなく楕石の機能を果たせないと考えられるもの(Pit65・68・73)、柱頭をもたないもの(その他のピット)がみられる(第15図・図版13)。規模は、おおむね径約30~50cm、深さ約10~50cm程度である。このうち、遺物が出土したピットは43基である(第16図)。

平面的な配置のみから獨立柱建物と想定したのは7棟であ

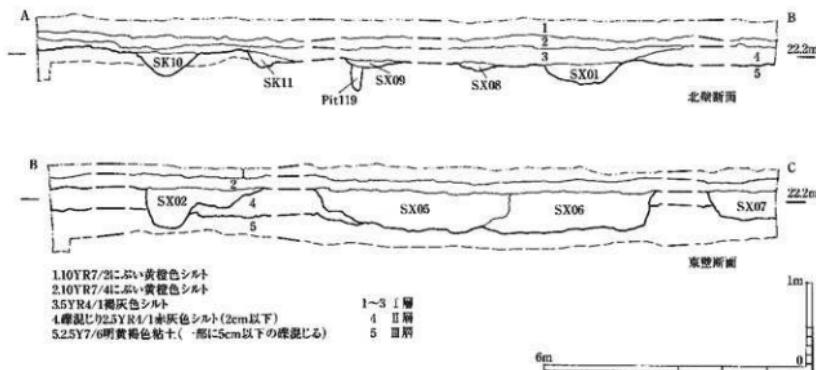
るが、調査区にはピットが密集しており、本書とは異なる配置の掘立柱建物を想定することも可能である。

•SB01

2間(約4m)、2間(約4m)で、面積約16m²。Pit85を加えれば總柱建物になる。Pit96から瓦器挽(204)が出土している。

•SB02

3間(約6m)、3間(約7m)で、面積約42m²。このうち、Pit



第14図 調査区断面図

32(196・197)、Pit59(199)、Pit61(200)で瓦器碗が出土している。197はIV-1期、13世紀中頃か。

・SB03

確認したのは一部のみで、2間(約4.5m)、2間以上(4.5m以上)、面積は約20.25m²以上。遺物は出土していない。

・SB04

3間(約6m)、3間(約7m)で、面積約42m²。東側の柱穴は確認しておらず、調査区外へ広がる可能性も考えられる。Pit155から瓦器碗(221)、Pit183から土師器皿(239)と瓦器碗(240)、Pit210から瓦器碗(261・262)が出土している。221はIV-1期、13世紀中頃か。

・SB05

2間(約5m)、2間(約5m)で面積約25m²。遺物は出土していない。Pit63を加えると総柱建物になる。

・SB06

確認したのは一部のみで、2間以上(約4m以上)、1間以上(約2m以上)。Pit188(243)とPit198(247)から瓦器碗が出土している。

・SB07

確認したのは一部のみで、いずれも1間以上(3m以上)。Pit197から黒色上器B類碗(232・233)、瓦器碗(231・234・235)、平瓦(236)が出土している。232・233は11世紀代、231・235はIV-1~2期、13世紀後半か。

・そのほかのピット

出土した遺物は次のとおり。Pit31から瓦器碗(195)、Pit42から瓦器碗(198)、IV-1~2期、13世紀後半か。Pit68から瓦器碗(202)。Pit70から瓦器碗(203)。Pit72から瓦器碗(205)、IV

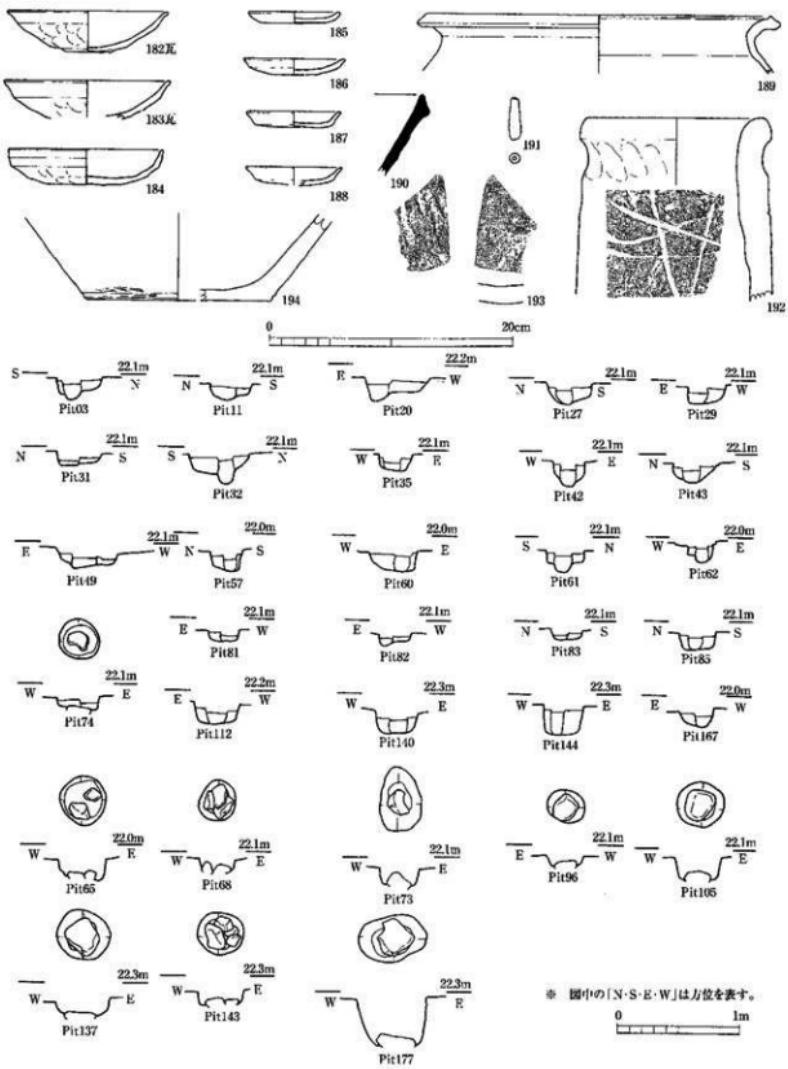
-1期、13世紀中頃か。Pit72から土師器皿(206)と瓦器碗(207・208)、208はおむねIII期、13世紀前半までか。Pit104から瓦器碗(210)。Pit105から瓦器碗(211)、IV-1期、13世紀中頃か。Pit113から土師器皿(213)。Pit139から瓦器碗(212)。Pit146から瓦器碗(214)。Pit149から瓦器碗(215)、IV-1期、13世紀中頃か。Pit151から瓦器碗(216)。Pit154から土師器皿(217)、瓦器碗(218~220)、217は底部外面に糸切り痕がこり、218はおむねIII期、12世紀末から13世紀前半か。Pit156から瓦器碗(222)。Pit174から瓦器碗(226)。Pit175から瓦器碗(227)。Pit176から瓦器碗(228・229)と平瓦(230)。228はIV-1期、13世紀中頃か。Pit180から陶器(237)、近世以降のものか。Pit181から瓦器碗(238)。Pit189から瓦器碗(244)。Pit192から瓦器碗(245)と土師器皿(246)。Pit199から瓦器碗(249)・皿(248)、丸瓦(250)。Pit205から瓦器碗(258・259)。Pit26から瓦器碗(260)。Pit217から黒色土器B類碗(267)。

出土遺物は、11世紀代や近世以降のものが一部にみられるが、ほとんどが13世紀代のものである。また、II層上面が造構面である土坑(SX04・05・06・07・09・10・12)の埋土除去後に一部のピットを検出していることから、検出したピットのほとんどはIII層上面が造構面と考えられる。

2.井戸

・SE01(第13・17・18図、図版9・12・14)

井戸掘方が径約2m、井戸幹が深約1mの石組みの井戸。砂岩で組まれたもの。SX02と幅20cm程の溝で繋がっている。平面検出時、SE01、SX02、両者を繋ぐ溝には切り合い関係はみられず、同時に埋没したものと考えられる。SX02へ繋がる溝が取りつく箇所のみ、石組みを溝の底面までとめている。検



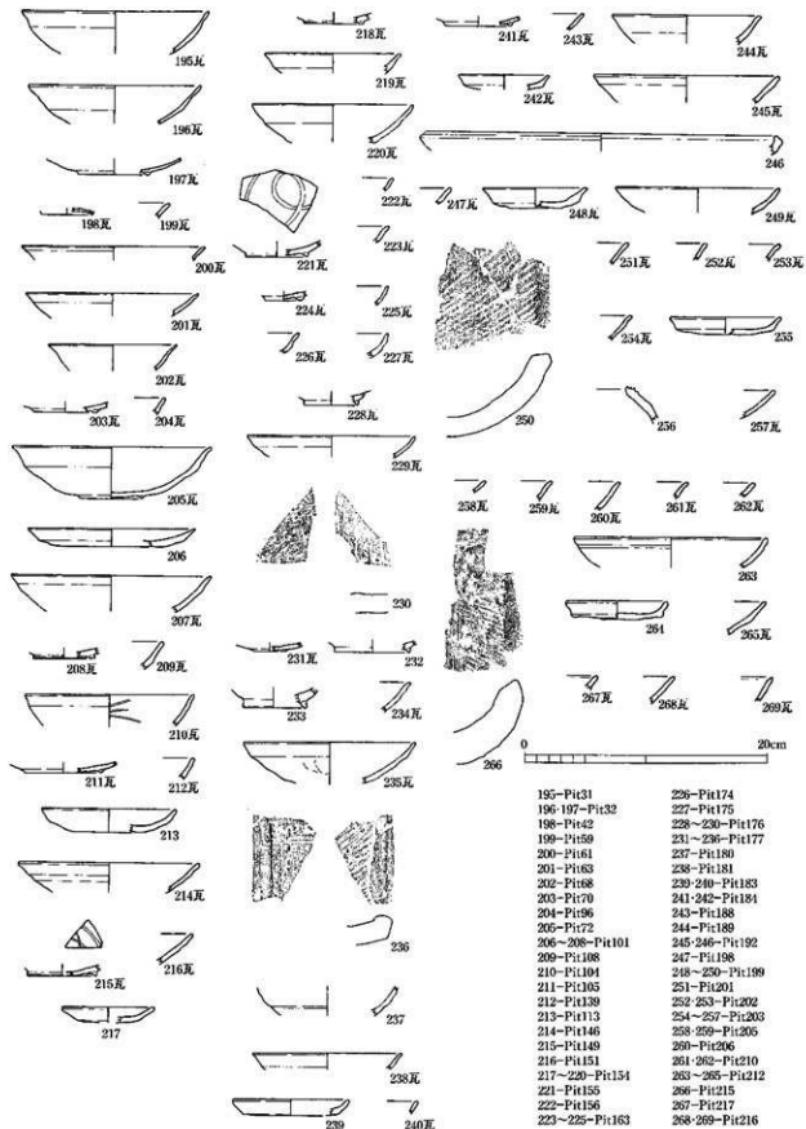
第154図 II層出土遺物・Pit断面図

出面から約2m掘削したが、危険防止のため造構底面までは行っていない。

石組みの掘方からは、瓦器輪(270・271)、土師器皿(272)が出土したほか、石組みに軒平瓦(273)が用いられていた。273は坂南市平野寺(長楽寺)出土のものと類似する。270はIV-1期、13世紀中頃か。273は平瓦部の凸面に粗いナデ、凹面に糸切り

痕がみられる。井戸枠内の埋上からは瓦器輪(276・277・279・280)、土師器皿(278)、灰釉(274)、平瓦(275)が出土している。

掘方の遺物から13世紀後半以降に構築され、埋没したのはSX02と同時期であることがわかる。なお、付近は近代まで井戸濁流が盛んで、同様の石組み井戸が多く使われていた。出土遺物の時期から中世集落の廃絶後に構築された井戸である可



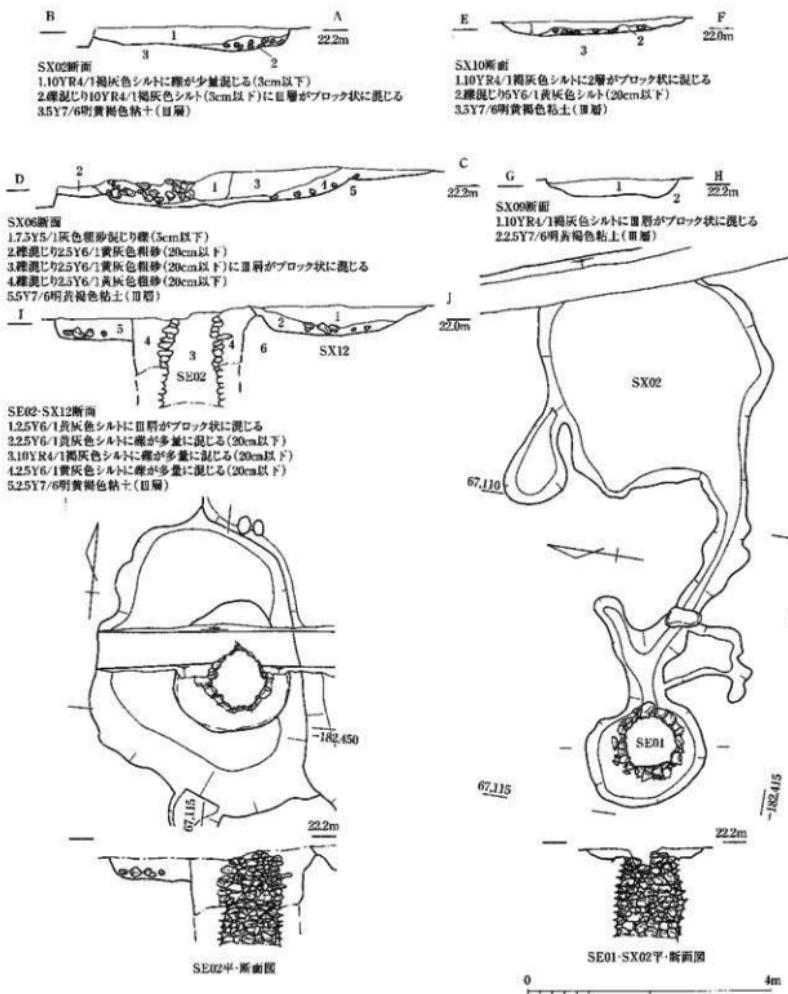
第16図 Pit出土遺物

能性が高く、近世まで機能した灌漑用の井戸の可能性が想定できる。

・SE02(第17・18・19図、図版9・12・14・15)

井戸掘方が径約5m、井戸枠が径約1mの石組みの井戸。断

面をみるとSX12に切られており、平面検出の状況からSK09を切っていることがわかる。砂岩で組まれたもの。検出面から約2m掘削したが、危険防止のため造構底面までは掘削していない。

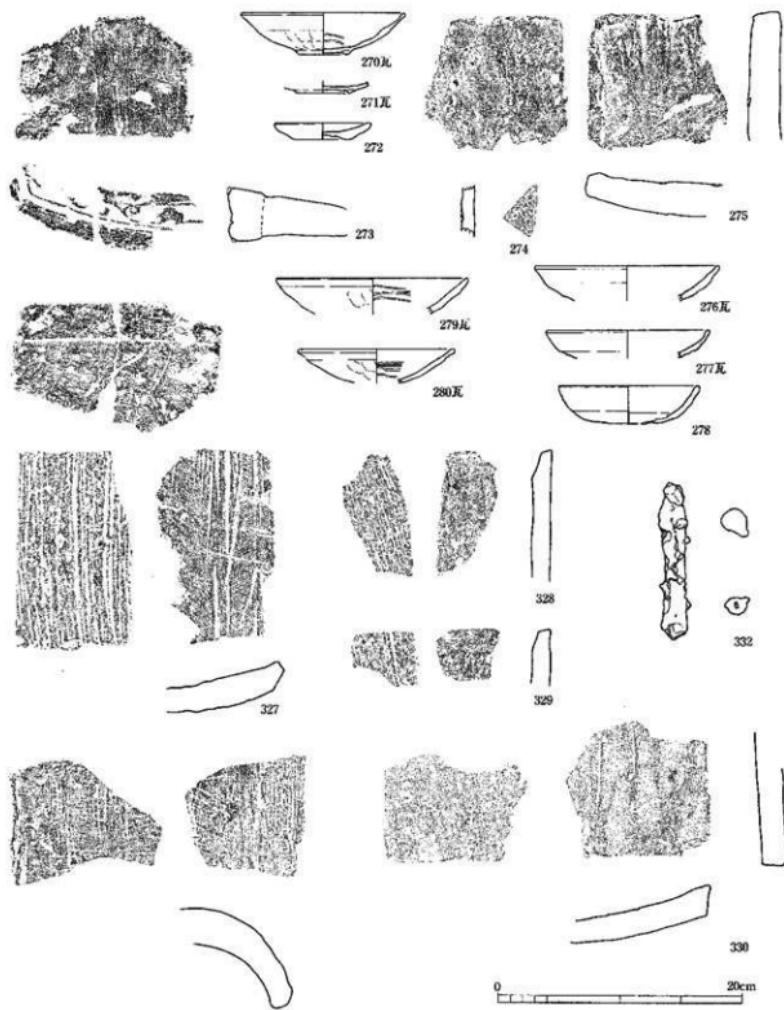


第17図 SE01・02、S X02-06・09・10・12平・断面図

石組みの掘方のうち層位的に占いもの(第17図5層)から出土した遺物は281～316・327～332、新しいもの(第17図4層)から出土したものは321～326である。5層から瓦器椀(281～294)・皿(295～299)・壺(300)、土師器皿(301～312)・釜(313・314)、須恵器すり鉢(315)・壺(316)、平瓦(327～331)、鉄製品(332)が出土している。281～288はIV～I～2期、13世紀後半か。289～294はおおむねII～III期、12世紀中頃から13世紀前半か。315はII～2段階、13世紀初頭か。また、4層から瓦器椀

(321～325)・皿(326)が出土している。井戸枠内の埋土(第17図3層)からは瓦器椀(317～320)が出土している。318・320はIV～1～2期、13世紀後半か。

掘方の遺物から、13世紀後半以降に構築されたことがわかるが、埋没した時期は不明である。なお、付近は近代まで井戸灌漑が盛んで、同様の石組み井戸が多く使われていた。遺構面は不明であるが、遺物の出土状況から中世集落の廃絶後に構築された井戸である可能性が高い。近世まで機能した灌漑用



第18図 SE01-02出土遺物

の井戸の可能性が想定できる。

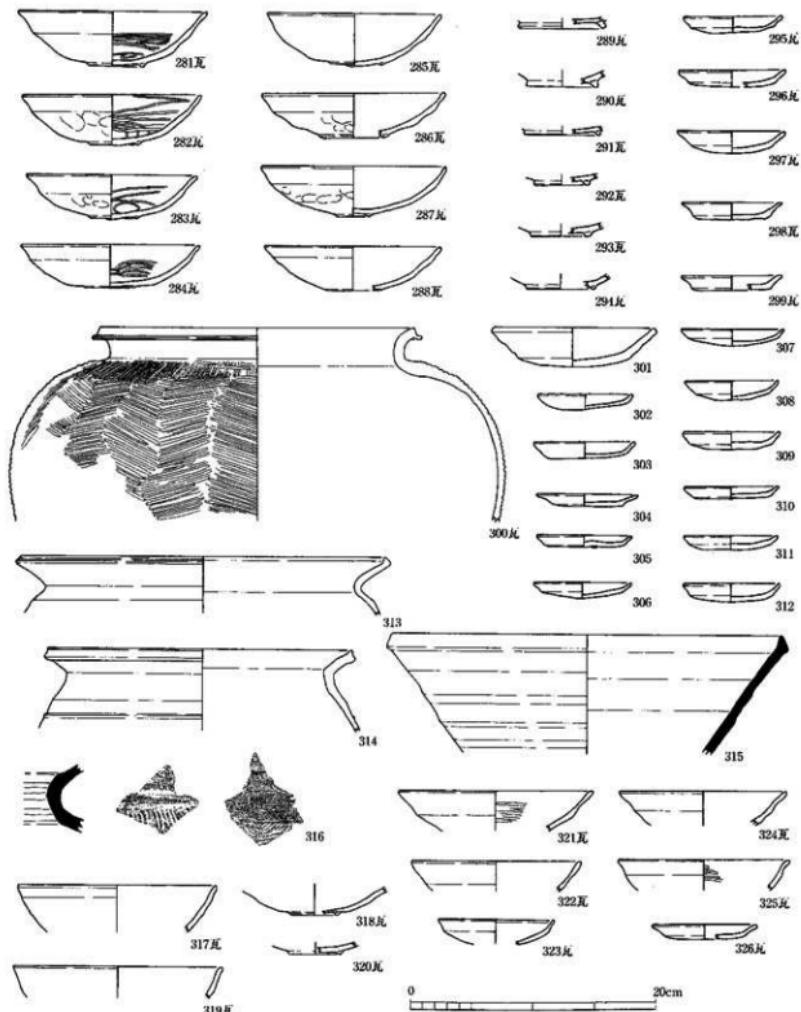
3. 土坑

調査でSK(土坑)およびSX(不明土坑)として扱った遺構のうち、遺物が出土したものを中心概観する。なお、II層上面を遺構面とする土坑は、人為的に埋められた可能性が考えられる。近隣の地権者によると、近代に付近の耕作地で壁上用の粘土を探取していたとのことで、II層上面を遺構面とする上坑は、その痕跡の可能性が考えられる。

・SK04(第13-20図、図版9-15)

長さ約1m、深さ約20cm。埋土は暗灰黄色シルトのみ。瓦器楕(336)、平瓦(333~335)が出土している。333は凸面に縄タキキ、ハナレ砂がのこる。334は凸面に鈎縁と平行する成型台の痕跡、凹凸面に糸切り痕がのこる。335は凸面に縄タキキとハナレ砂、凹凸面に糸切り痕がのこる。埋土の状況から、III層上面が遺構面と考えられる。

・SK05(第13-20図、図版9-15)



第19図 SE02出土遺物

径約50cm、深さ約40cm。埋土は褐色シルトのみ。土師器皿(337)、瓦器(338~341)が出土している。338はIV-1期、13世紀中頃か。埋土の状況から、Ⅲ層上面が造構面と考えられる。

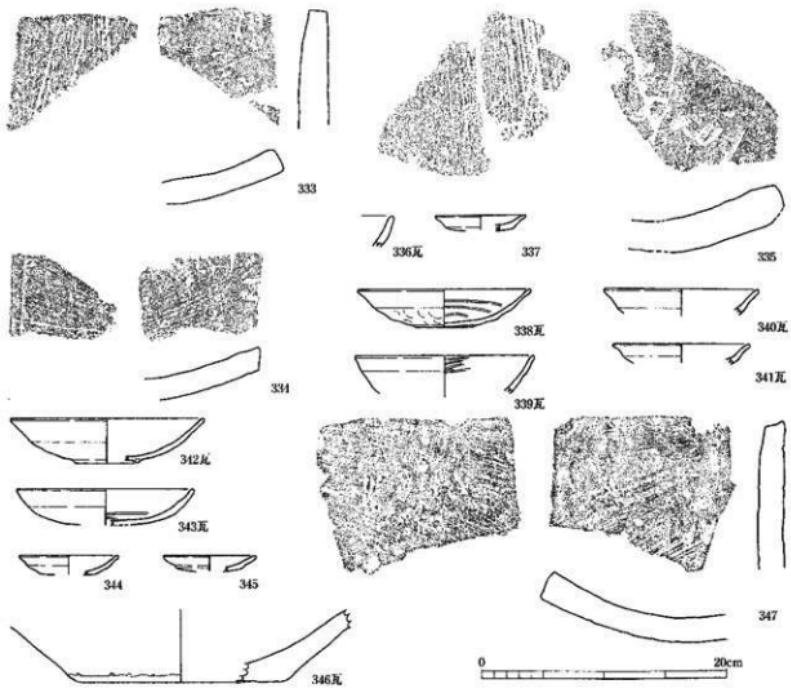
・SX01(第13~14・20図、図版9・11・15)

検出長約3m、深さ約20cm。埋土は褐色シルトのみ。瓦器(342~343)・すり鉢(346)、土師器皿(344・345)、平瓦(347)が出土している。342はIV-1~2期、13世紀後半か。I層直下で

検出したため(第14図)、造構面は断面から判断できない。出土遺物と土坑の形状、埋土の状況からⅢ層上面が造構面と考えられる。

・SX02(第13~14・17~21図、図版9~10・12・15)

一辺約4m、深さ約30cm。SE01と幅約50cmの溝で繋がっており、平面検出時に切り合い関係はみられなかったことから、ほぼ同時に埋まったと考えられる。埋土は2層にわかれ、下層



第20図 SK04-05、SX01出土遺物

は漆混じりの褐灰色シルトにⅢ層がブロック状に混じることから、人為的に埋められたものと考えられる。埋土に混じる礫は3cm以下。平瓦(348~350)、丸瓦(351~354)、黒色上器A類碗(355)、瓦器碗(356)が出土している。356はIV-1~2期、13世紀後半か。

断面からⅡ層上面が遺構面であり、出土遺物は遺構の年代を示すものではないことがわかる。推測ではあるが、SE01とSX02は蓋施設の可能性を考えられる。SE01と繋がる溝はSE01に向かってレベルを上げていることから、SE01が蓋施設用の井戸で、SX02は井戸から汲み上げた用水の水溜とも考えられる。

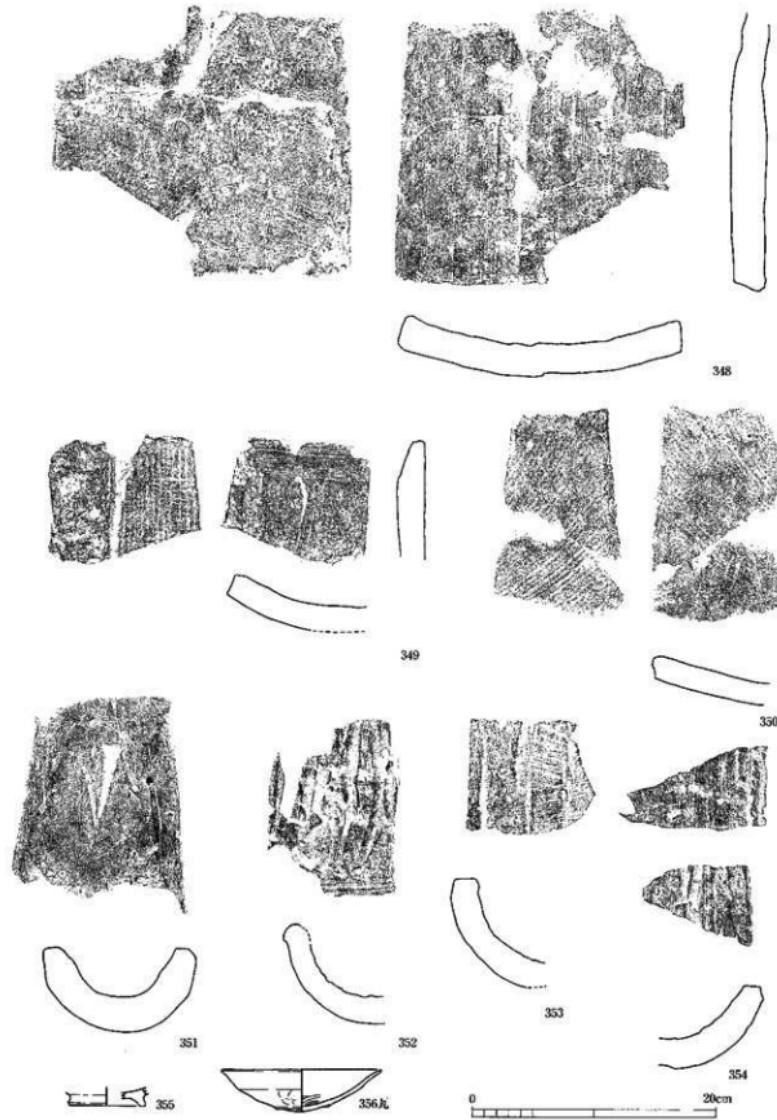
・SX03(第13・23図、図版9)

長辺約2m、深さ10cm。埋土は炭混じり黒褐色シルトのみ。平面検出の状況から、SE01の一部とSX02と繋がる溝を切っていることがわかる。上器皿(380)、平瓦(381)が出土している。検出面はⅢ層上面であるが、Ⅱ層上面が遺構面であるSX02を切っていることから、Ⅱ層上面が遺構面である。

・SX04(第13・16-22図、図版9・11・15-16)

辺約4m、深さ約40cm。埋土は黒褐色シルトのみで、50cm以下の礫を多く含む。この礫は遺構底面から浮いた状態であり、構造物ではない。人為的に埋めた時に混入したものと考えられる。なお、50cm程の礫は調査区付近の耕作地のアゼに多く用いられている。磁器(357)、瓦器碗(358~361)、皿(362)、土師器皿(363~373)、釜(376・377)、青磁碗(374・375)、平瓦(378・379)が出土している。357は近世以降のもの。358・359はIV-1~2期、13世紀後半か。360~361はおおむねⅢ期、13世紀前半までか。374は龍泉窯系青磁碗I-4類、12世紀後半か。194は龍泉窯系青磁碗I-5類、13世紀前半か。376・377は13世紀代。378・379は凸面にハナレ紗、模骨状の圧痕がのこり、このうち378は一部に被熱した痕跡がみられる。出土遺物から、近世以降に埋められた遺構であることがわかる。

埋土除去後、遺構底面でピットを検出した(Pit215・219)。いずれのピットも埋土は炭混じり黄灰色シルト。このうちPit215からは丸瓦(第16図266)が出土している。



第21図 SX02出土遺物

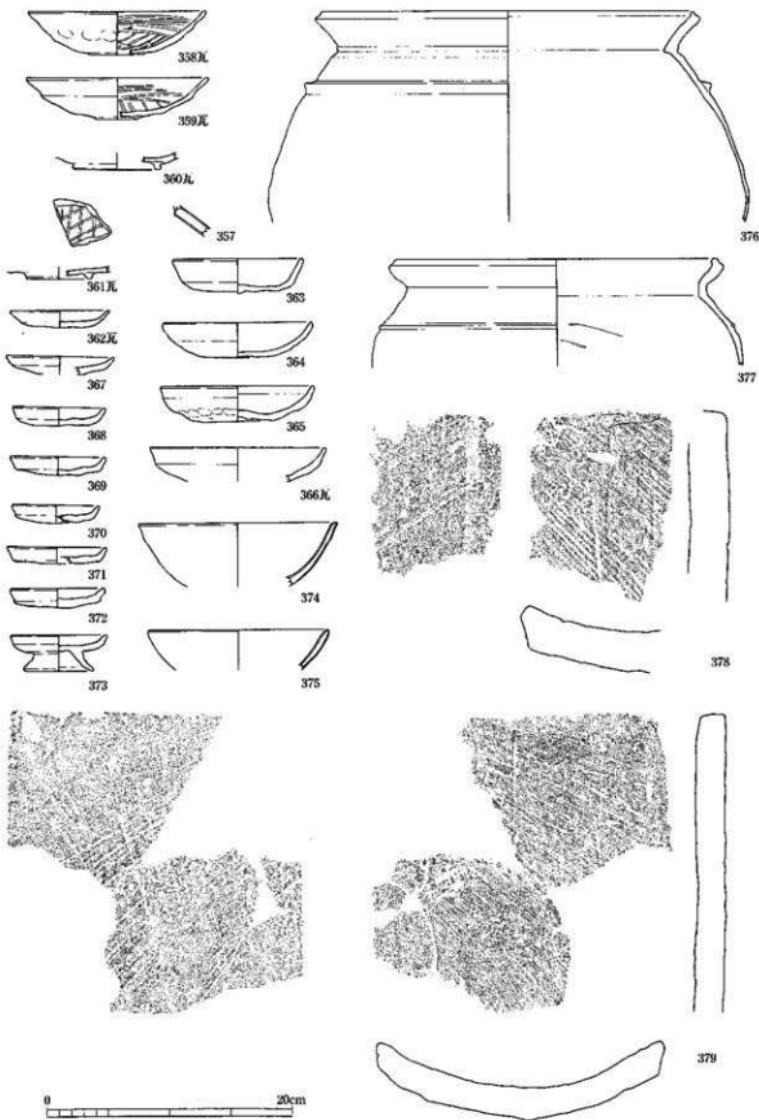
・SX05(第13・14図、図版9・10)

径3m以上、深さ約50cm。埋土は疊混じり黒褐色シルトのみ。
遺物は出土していない。断面からⅡ肩上面を造構面とする造
構で、出土遺物から近世以降に埋められているSX06に後出す

ることがわかる(第14図)。

埋土除去後、遺構底面でピットを検出した(Pi209)。遺物は
出土していない。

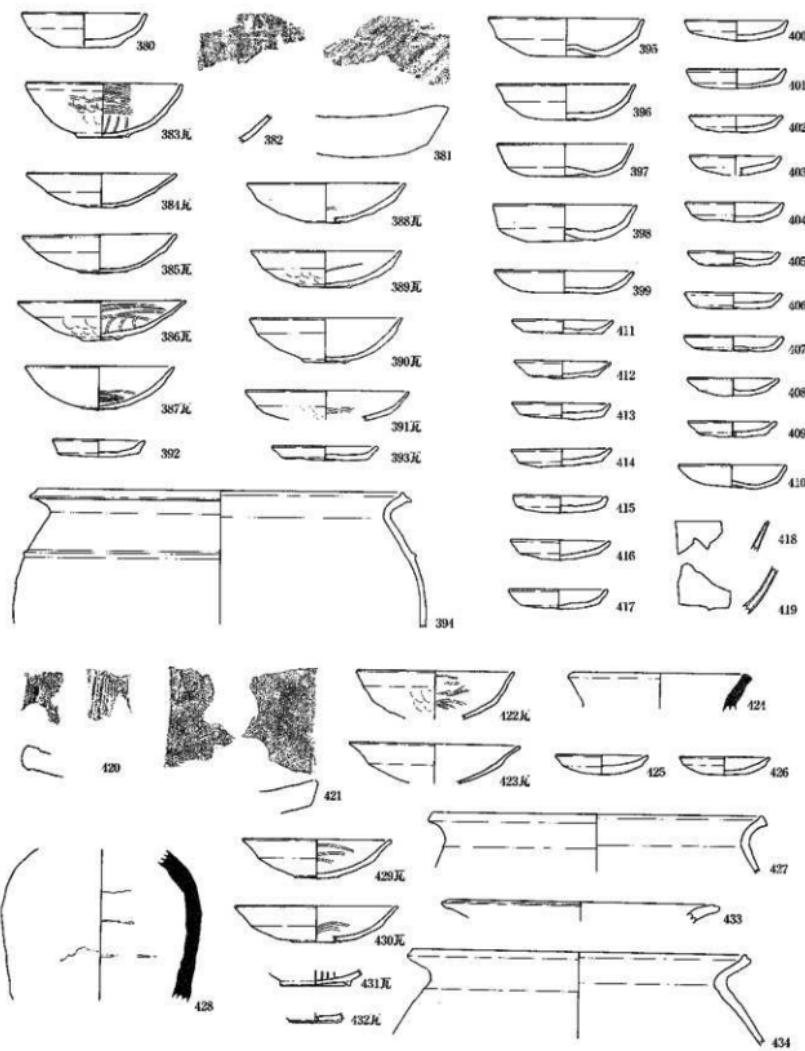
・SX06(第13・14・16・17・23図、図版9・10・16)



第22図 SX04出土遺物

一辺約5m、深さ約30cm。埋土は、4層でいずれも20cm以下
の繩が混じる。造構面であるⅢ層がブロック状に混じること
から、掘削後すぐに人为的に埋められたと考えられる。陶器
(382)、瓦器輪(383~391)・皿(393)、土師器皿(392~395~417)・

釜(394)、青磁碗(418~419)、平瓦(420~421)が出土している。
382は近世以降のもの。384~390はIV-1~2期、13世紀後半
か。394は13世紀代。418~419は龍泉窯系青磁碗I~4類、12世
紀後半か。420は四面側縁に平行して成型台の压痕と考えられ

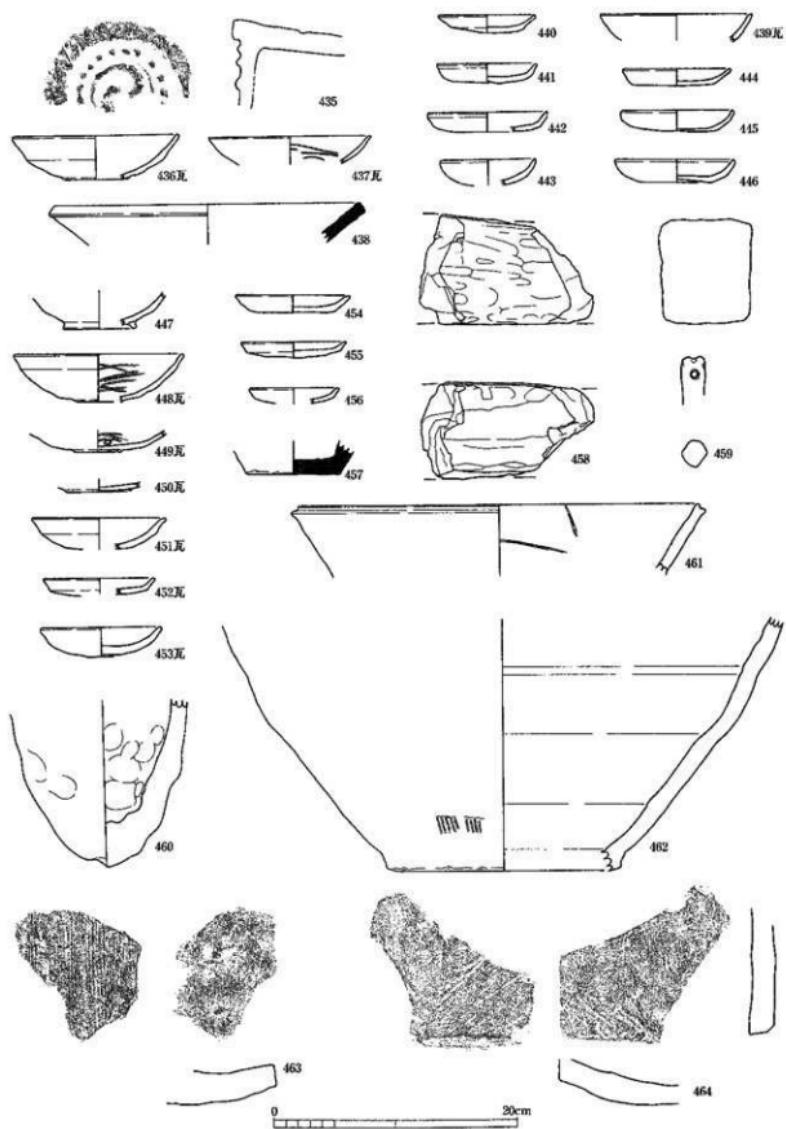


第23図 SX03-06-07-09出土遺物

る痕跡、凸面にハナレ砂がのこる。421は凸面にハナレ砂がのこる。断面と出土遺物から、近世以降の遺構であることがわかる。

坪土除去後、遺構底面でピットを検出した(Pit161~164・

166~168・180~211~213・216~218)。出土遺物は次のとおり。Pit163から瓦器椀(223~225)、Pit121から陶器(263)、土師器皿(264)、瓦器椀(265)が出土している。このうち、263は近世以降か。Pit1216から瓦器椀(268・269)が出土しており、おおむね



第24図 SX10-11-12出土遺物

13世紀代か。269は大和型か。Pit1217から黒色土器B類(267)が出土している。11世紀代か。

・SX07(第13・14・23図、図版9・10・16)

検出長約3m、深さ約30cm。埋土上は疊混じり黒褐色シルトの

み。瓦器輪(422・423)、須恵器蓋(424)、上部器皿(425・426)・釜(427)が出土している。423はIV-1期、13世紀中頃か。断面からII層上面が遺構面であることがわかる。

埋土除去後、遺構底面でピットを検出した(Pit184-187)。こ

のうちPit184からは瓦器椀(241)・皿(242)が出土している。241はIV-1～2期、13世紀後半か。

・SX09(第13・17・23図、図版9・11・16)

最大径約3m、深さ約20cm。埋土は、Ⅲ層がブロック状に混じる褐色灰色シルトのみ。須恵器壺(428)、瓦器椀(429～432)、灰釉壺(433)、土師器釜(434)が出土している。429・430はIV-1～2期、13世紀後半か。Ⅲ層上面が検出面であるが、Ⅱ層が堆積していない箇所で検出している。遺構面がⅡ層上面かⅢ層上面かは、判断できない。

埋土除去後、遺構底面でピットを検出した(Pit117～119)。遺物は出土していない。

・SX10(第13・16・17・24図、図版9・11)

径約4m、深さ約20cm。埋土はⅢ層がブロック状に混じる褐色灰色シルトと、20cm以下の礫が混じる黄灰色シルトからなる。埋土の状況から、掘削後すぐに入為的に埋められたものと考えられる。平面検出の状況からSX11に切られていることがわかる。軒丸瓦(435)、瓦器椀(436・437)、須恵器すり鉢(438)が出土している。435は近世以降のものか。436はIV-1期、13世紀中頃か。438はII-2段階13世紀初頭か。検出面はⅢ層上面であるが、近世以降と考えられる遺物が出土していることから、遺構面はⅡ層上面である。

埋土除去後、遺構底面でピットを検出した(Pit108・225)。このうちPit108から瓦器椀(209)が出土している。

・SX11(第13・17・24図、図版9・9)

径約3m、深さ約10cm。埋土は黄灰色シルトのみ。瓦器椀(439)、土師器皿(440～446)が出土している。平面検出の状況から、近世以降に埋没したと考えられるSX10に後出することがわかる。Ⅲ層上面で検出したが、Ⅱ層上面が遺構面である。

・SX12(第13・16・24図、図版9・12)

検出長約10m、深さ約50cm。埋土はⅢ層がブロック状に混じる黄灰色シルトと20cm以下の礫が混じる黄灰色シルトからなる。埋土の状況から掘削後すぐに入為的に埋められたものと考えられる。断面からSE02に後出する遺構であることがわかる。黒色土器A類椀(447)、瓦器椀(448～451)・皿(452・453)、土師器皿(454～456)・真蛸壺(460)・土錐(459)、須恵器壺(457)、陶器すり鉢(461)・壺(462)、平瓦(463・464)が出土している。447は10世紀代か。448～450はIV-1～2期、13世紀後半か。458は瓦質、両縁を欠き、表面にヘラ状工具の痕跡がみられる。近世以降の道具瓦か。461・462は茶褐色の胎土、常滑焼か。463は凹面に模骨状の圧痕、凸面に繩タタキが一部のこる。464は凹凸面にハナレ砂がみられる。

458を除いては中世の遺物が出土しているが、埋土の状況から掘削後すぐに入為的に埋められたと考えられることから、Ⅲ層上面が検出面であるが、Ⅱ層上面が遺構面であると考えられる。

埋土除去後、遺構底面においてピットを検出した(Pit63-67・201～205)。このうち、Pit63・201～203・205から遺物が出土している。Pit63からは瓦器椀(201)が出土している。Pit201からは瓦器椀(251)が出土している。Pit202からは瓦器椀(252・253)が出土している。Pit203からは瓦器椀(254・257)・土師器皿(255)・釜(256)が出土している。

註釈

- ① 京都市教育委員会「奈良代遺跡発掘調査報告書V」(1988)
- ② (財)大阪府文化財資金研究センター「男山遺跡発掘調査報告書」(2001)
- ③ 京都市教育委員会「京南市遺跡群発掘調査報告書V」(1988)
- ④ (財)大阪文化財センター「奈良代遺跡」大阪府下産文化財研究会(第30回)資料(1994)
- ⑤ 京都市教育委員会「奈南市遺跡群発掘調査報告書V」(1988)
- ⑥ 京都市教育委員会「奈南市遺跡群発掘調査報告書VI」(1991)
- ⑦ 京都市教育委員会「奈南市遺跡群発掘調査報告書VII」(1992)
- ⑧ 京都市教育委員会「奈良代遺跡」京都市文化年報1・2(1995)
- ⑨ 京都市教育委員会「奈南市遺跡群発掘調査報告書X」(1994)
- ⑩ 京都市教育委員会「奈良代遺跡」京都市文化年報1・2(1995)
- ⑪ 京都市教育委員会「奈南市遺跡群発掘調査報告書X」(1996)
- ⑫ 京都市教育委員会「奈南市遺跡群発掘調査報告書XII」(1996)
- ⑬ 京都市教育委員会「奈南市遺跡群発掘調査報告書XIII」(1996)
- ⑭ 京都市教育委員会「奈南市遺跡群発掘調査報告書XIV」(1996)
- ⑮ 京都市教育委員会「奈南市遺跡群発掘調査報告書XV」(1996)
- ⑯ 京都市教育委員会「奈南市遺跡群発掘調査報告書XVI」(2000)
- ⑰ 京都市教育委員会「奈南市遺跡群発掘調査報告書XVII」(2001)
- ⑱ (財)大阪文化財センター「奈南代遺跡」大阪府下産文化財研究会(第30回)資料(1994)
- ⑲ ②と同じ、第12回の「岩屋山G3」における再発見。
- ⑳ 由本芳一・大坂慶之「平安時代光孝瓦の横幅」第4回瀬戸古代寺院フォーラム中世篇の幕開け～11・12世紀の寺院の考古学的研究～「新河原泉文庫、P.15の間に掲載の軒平丸と丸文が類似する。

1. 新伝寺遺跡91-1区で確認した中世集落について

包含層の遺存状況がよい箇所(第2図)で確認した遺構は、出土遺物が示す年代の遺構と考えられる。これらは、遺構および直上包含層から出土した遺物から、13世紀前半から後半の遺構と考えられる。掘立柱建物は5棟とした。建物主軸からのみでグルーピングを行うと、A群(SB01-02-05)とB群(SB03-04)に分かれる。出土遺物は限定されており、切り合い関係もみられないため前後関係は不明である。SK15は、遺構の形状から井戸の可能性も考えられる。SK29は真蛸壺焼成土坑で、SK07-08などの不定形土坑は推測ではあるが真蛸壺製作に伴う粘土探掘土坑なのかもしれない。SD01は、方位を意識したものであることと、西側に掘立柱建物群が存在することから、居住区域を区画する目的で設置されたものと考えられる。加えて、SD01北端と直交するSD06は、出土遺物はないがSD01と同一の施設である可能性がある。

新伝寺遺跡で確認した集落は、東側と北側を溝で区画された1200m以上の居住域に、10~20m前後の面積をもつ2~3棟の掘立柱建物を1単位とし、2期以上(A・B群)にわたって営まれていた。集落の存続期間は、おおむね13世紀前半から後半で、継続して営まれたものと考えられる。

なお、周辺遺跡における既往の調査では、海会寺跡で飛鳥時代から平安時代、北野遺跡55-7-91-1-99-3区で平安時代の掘立柱建物が確認されている。しかし現状では、13世紀後半以降の集落域は、周辺遺跡を見渡しても確認されていない。

2. 横代遺跡03-3区で確認した中世集落について

中世の遺構面直上の包含層(II層)が調査区の南東半に一部にしきみられず、近世以降の不定形土坑による影響を受けており、検出面が同一であった。断面観察による遺構面の確認、出土遺物、埋土の状況から、近世以降と考えられる遺構はSE01-02、SX02-07-10-12、Pit180-212で、それ以外のピットや土坑は13世紀後半までの年代の遺構と考えられる。13世紀代のものと考えられるピットから掘立柱建物を7棟想定した。建物主軸からのみでグルーピングを行うと、A群(SB01~04)とB群(SB05~07)に分かれる。切り合い関係はなく、前後関係は不明である。このほか、Pit101-223-122-125-134-208が直線状には等間隔に並んでいることから横列とも考えられ、方向性の類似からB群に伴うものと想定できる。13世紀代のものと考えられる土坑は、不定形なものと径約50cmのものが

あるが、明確な用途は不明である。

横代遺跡で確認した中世集落は、20m²前後の純柱建物1棟と、20~40m²程の掘立柱建物2~3棟を1単位とし、2期以上(A・B群)にわたって営まれており、B群には横列を伴う可能性も考えられる。10~12世紀の遺物が散見されるが、集落の存続期間は、おおむね13世紀前半から後半を最盛期として継続して営まれたものと考えられる。

なお、既往の調査では、92-1区で平安時代後期の掘立柱建物、府協会93区で鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物や井戸が確認されている。平安時代以降は、横代遺跡内において時期的に連続した集落域の変遷がたどれる。

3. 両集落の評価

両遺跡を、地域史のなかに位置づけるには、ある程度の評価が必要となる。先史の業績をもとに、遺物および遺構の対比をおこなうこと、両遺跡を評価する際の資料を提示してみたい。

土器類は、すべての層位・遺構から出土した中世のものを、破片数でカウントした。なお、掲載している遺物は、断面図のみを掲載しているものを除くと、残存口径からおおむね一個体分と考えられるが、ここ(第3・4表)では1点(破片)としてカウントしている。計量の際に用いた分類は、宇野隆夫氏による用途別区分をもとにし、真蛸壺と土鍤は氏の分類に該当しないため「漁撈具」として項目を追加した。

出土した土器類の破片数を比較すると、用途別の集計結果で大きな違いが3点みられる。

漁撈具の割合が異なる。新伝寺遺跡では30.04%(SK29から出土した真蛸壺が8割を占め、これらは総重量から個体数を推定すると27個体分になる)であるが、横代遺跡では0.19%に過ぎない。

食器における土器と瓦器の比率が異なる。横代遺跡の場合は土器が40.36%で瓦器が59.55%、新伝寺遺跡の場合は土器が48.74%で瓦器が51.02%である。

貯蔵具における種類の比率が異なる。横代遺跡では土師器(7.41%)・瓦器(35.8%)・須恵器(27.16%)・国産陶器(29.63%)であるが、新伝寺遺跡では土師器(17.27%)・瓦器(17.27%)・須恵器(50%)・国産陶器(15.45%)である。

遺構の比較は広瀬和翠氏の論考をもとにする。氏は、当該期における建物群の「建物規模、構造、屋敷地の面積」の差異から△-D型の類型を提示し、各類型は「階層性を反映している」

と指摘している。

両遺跡の建物群を氏の分類にあてはめると、幡代遺跡はB類型、新伝寺遺跡はSD01・06を積極的に評価するか否かで類型が異なる。幡代遺跡のものは「屋」と「倉」があり、「屋」の面積がおむね一致することから「B型」であろうか。新伝寺遺跡のものは、SD01およびSD06を区画施設とし区画施設の規模

や区画で囲まれた居住区域の面積を重視すると「階層性」の最も高い「D型」になるが、孤立柱建物の面積のみを重視すると「階層性」の最も低い「A型」になる。

註案

① 宇野龍太「中世食器様式の意味するもの 計量分析による使用法の復元」[国立歴史民俗博物館研究報告] 第71集(1997)

② 広瀬和雄「中世への転換」[岩波講座 日本書紀学 6 变化と闘争](1985)

第3表 新伝寺遺跡出土土器類の種類別・用途別破片数

	総計 (%)	漁撈具抜き (%)
土	食 勝 560 (23.76)	560 (62.5)
	調 理 6 (0.25)	6 (0.67)
	貯 藏 19 (0.81)	19 (2.12)
	煮 炊 256 (10.86)	256 (28.57)
器	漁 撈 具 1461 (61.99)	-
	不 明 55 (2.33)	55 (6.14)
	小 計 2357 (47.76)	896 (25.8)
	食 勝 2421 (98.18)	2421 (98.22)
瓦	調 理 2 (0.08)	2 (0.08)
	貯 藏 19 (0.77)	19 (0.77)
	煮 炊 16 (0.65)	16 (0.65)
	漁 撈 具 1 (0.04)	-
器	不 明 7 (0.28)	7 (0.28)
	小 計 2466 (49.97)	2465 (70.98)
	調 理 23 (27.06)	23 (27.06)
	須恵器 貯 藏 55 (64.71)	55 (64.71)
須恵器	不 明 7 (8.24)	7 (8.24)
	小 計 85 (1.72)	85 (2.44)
	調 理 3 (15)	3 (15)
	貯 藏 17 (85)	17 (85)
国産 陶器	小 計 20 (0.41)	20 (0.58)
	中国製 食 勝 7 (100)	7 (100)
中国製 磁 器	小 計 7 (0.14)	7 (0.2)
	合 計 4935 (100)	3473 (100)
	総計 (%)	漁撈具抜き (%)
食 勝	土 師 器 560 (18.74)	560 (18.74)
	瓦 器 2421 (81.02)	2421 (81.02)
	中 国 製 7 (0.23)	7 (0.23)
	小 計 2988 (61.41)	2988 (87.78)
調 理	土 師 器 6 (17.65)	6 (17.65)
	瓦 器 2 (5.88)	2 (5.88)
	須 恵 器 23 (67.65)	23 (67.65)
	国 產 3 (8.82)	3 (8.82)
貯 藏	小 計 34 (0.7)	34 (1)
	土 師 器 19 (17.27)	19 (17.27)
	瓦 器 19 (17.27)	19 (17.27)
	須 恵 器 55 (50)	55 (50)
煮 炊	国 產 17 (15.45)	17 (15.45)
	小 計 110 (2.26)	110 (3.23)
漁 撈	土 師 器 256 (94.12)	256 (94.12)
	瓦 器 16 (5.88)	16 (5.88)
合 計	小 計 272 (5.59)	272 (7.99)
	土 師 器 1461 (99.93)	-
漁 撈	瓦 器 1 (0.07)	-
	小 計 1462 (30.04)	-
合 計	4866 (100)	3404 (100)

第4表 幡代遺跡出土土器類の種類別・用途別破片数

	総計 (%)	漁撈具抜き (%)
土	食 勝 2203 (83.54)	2203 (83.89)
	調 理 2 (0.08)	2 (0.08)
	貯 藏 6 (0.23)	6 (0.23)
	煮 炊 193 (7.32)	193 (7.35)
器	漁 撈 具 11 (0.42)	-
	不 明 222 (8.42)	222 (8.45)
	小 計 2637 (43.96)	2626 (43.85)
	食 勝 3250 (98.54)	3250 (98.54)
瓦	調 理 2 (0.06)	2 (0.06)
	貯 藏 29 (0.88)	29 (0.88)
	煮 炊 8 (0.24)	8 (0.24)
	不 明 9 (0.27)	9 (0.27)
器	小 計 3298 (54.97)	3298 (55.08)
	調 理 11 (32.35)	11 (32.35)
	須 恵 器 22 (64.71)	22 (64.71)
	不 明 1 (2.94)	1 (2.94)
須 恵 器	小 計 34 (0.57)	34 (0.57)
	調 理 1 (4)	1 (4)
	貯 藏 24 (96)	24 (96)
	小 計 25 (0.42)	25 (0.42)
国 產 陶 器	中 国 製 食 勝 5 (100)	5 (100)
	小 計 5 (0.08)	5 (0.08)
合 計	5999 (100)	5988 (100)
	総計 (%)	漁撈具抜き (%)
食 勝	土 師 器 2203 (40.36)	2203 (40.36)
	瓦 器 3250 (59.55)	3250 (59.55)
	中 国 製 5 (0.09)	5 (0.09)
	小 計 5458 (94.64)	5458 (94.82)
調 理	土 師 器 2 (12.5)	2 (12.5)
	瓦 器 2 (12.5)	2 (12.5)
	須 恵 器 11 (68.75)	11 (68.75)
	国 產 1 (6.25)	1 (6.25)
貯 藏	小 計 16 (0.28)	16 (0.28)
	土 師 器 6 (7.41)	6 (7.41)
	瓦 器 29 (35.8)	29 (35.8)
	須 恵 器 22 (27.16)	22 (27.16)
煮 炊	国 產 24 (29.63)	24 (29.63)
	小 計 81 (1.4)	81 (1.41)
	土 師 器 193 (96.02)	193 (96.02)
	瓦 器 8 (3.98)	8 (3.98)
漁 撈	小 計 201 (3.49)	201 (3.49)
	土 師 器 11 (100)	-
合 計	小 計 11 (0.19)	-
	合 計 5767 (100)	5756 (100)

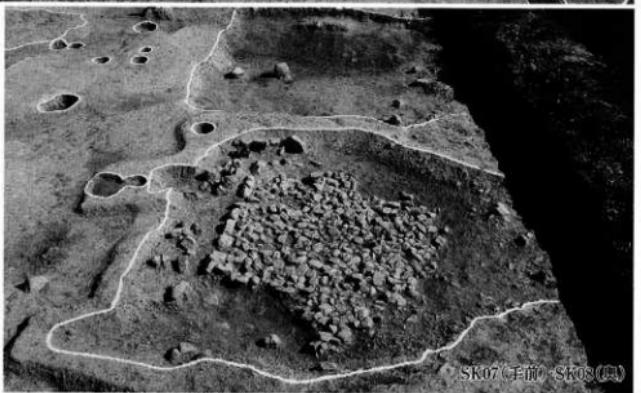


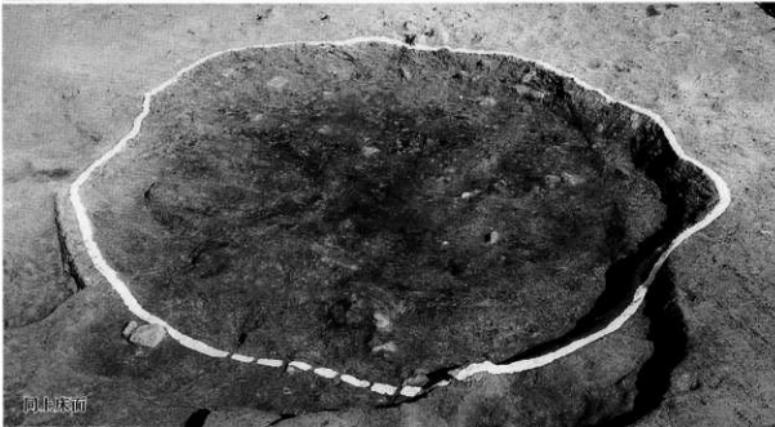
全景（上段）

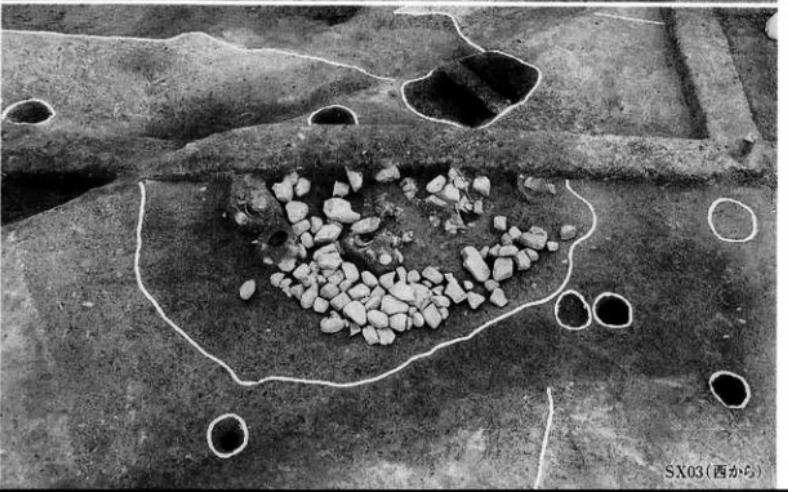


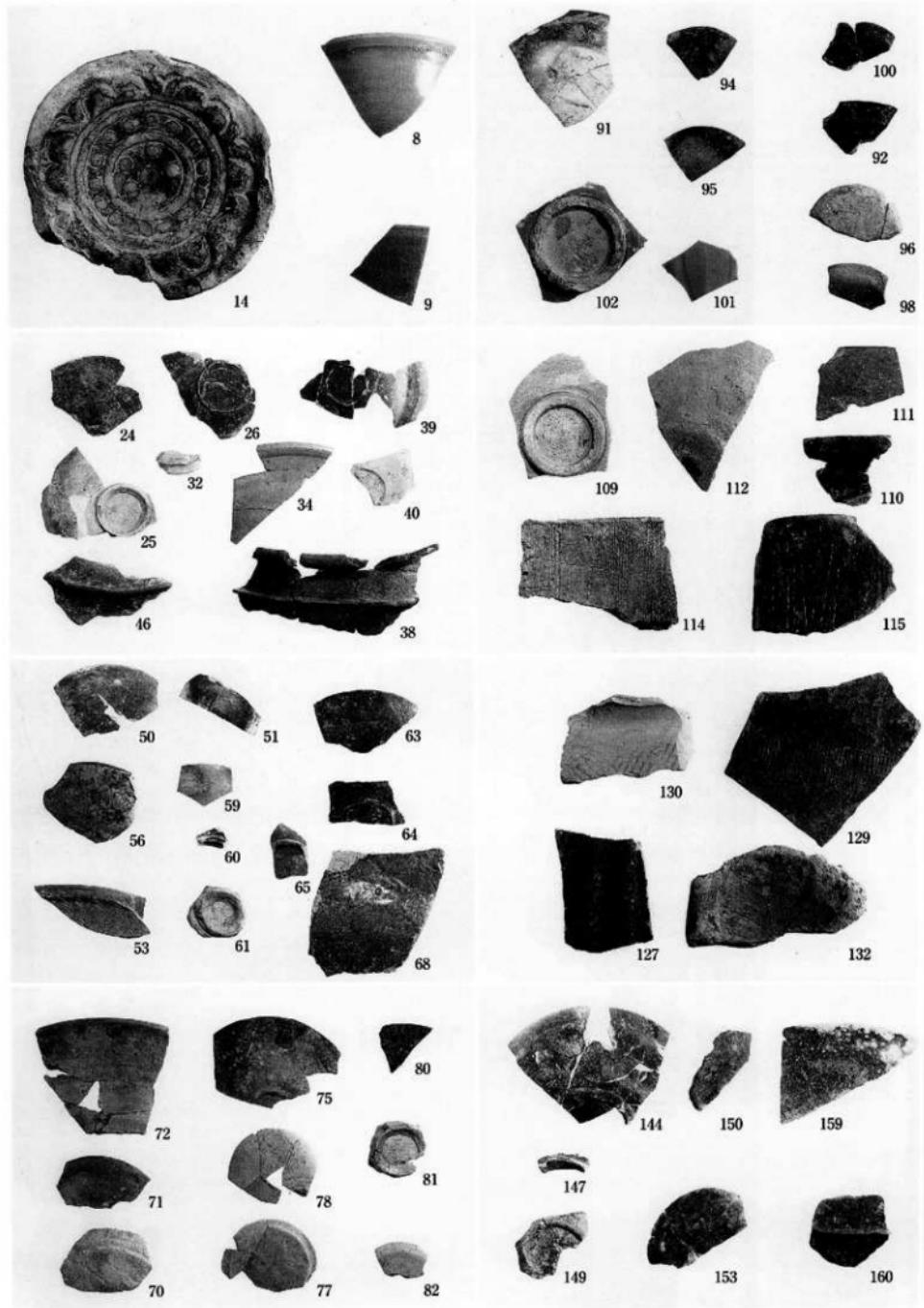
同上













116



118



120



117



119



121



113



123









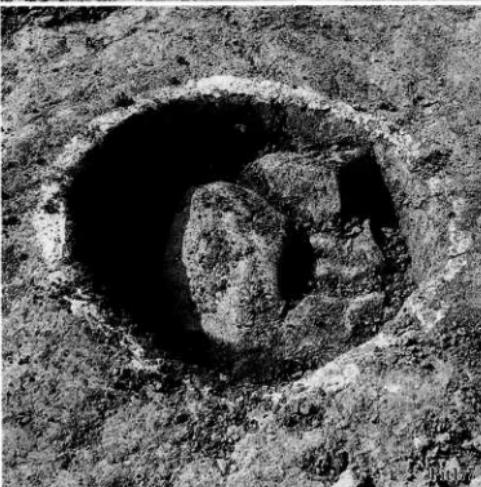




Pit29



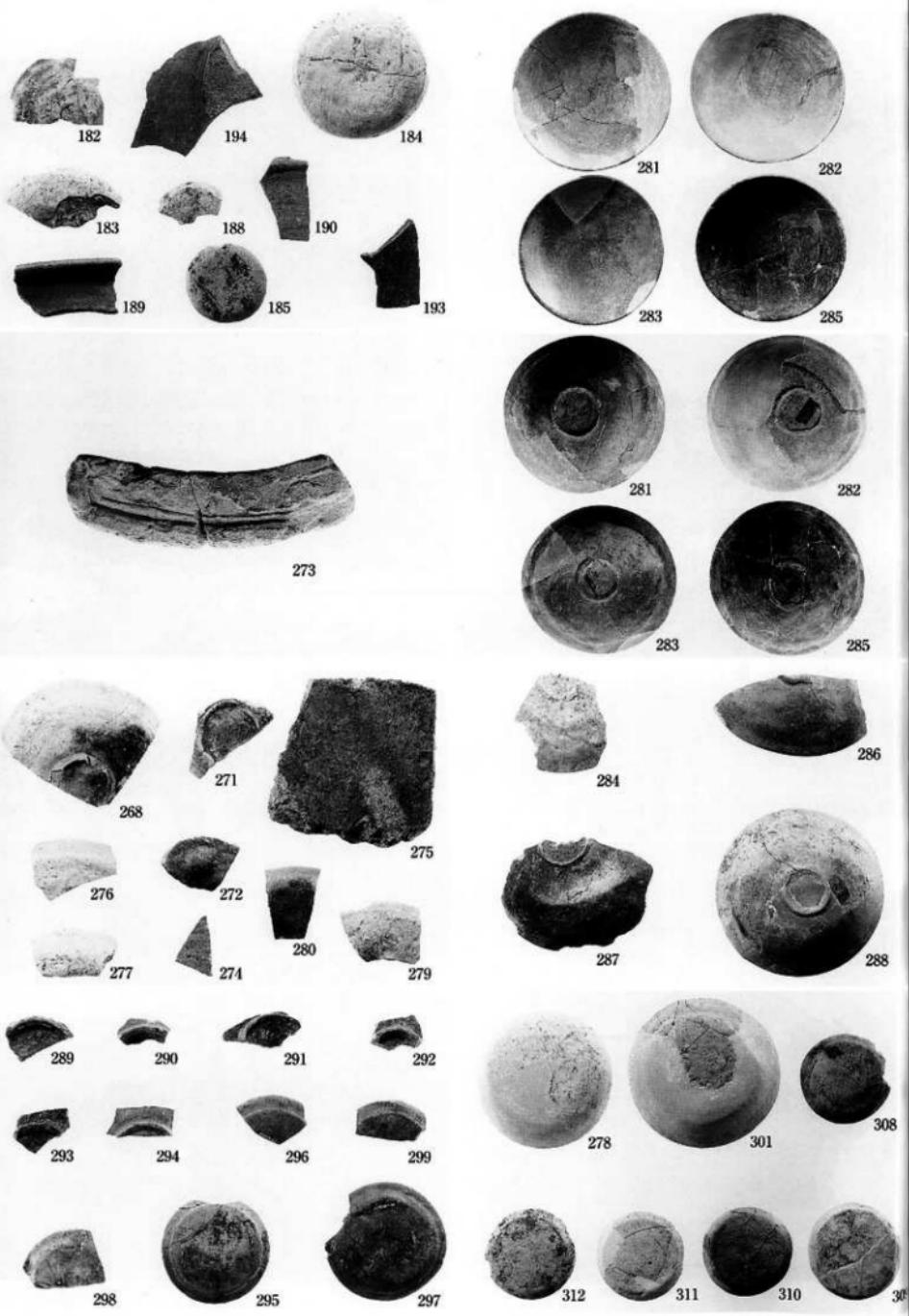
Pit143

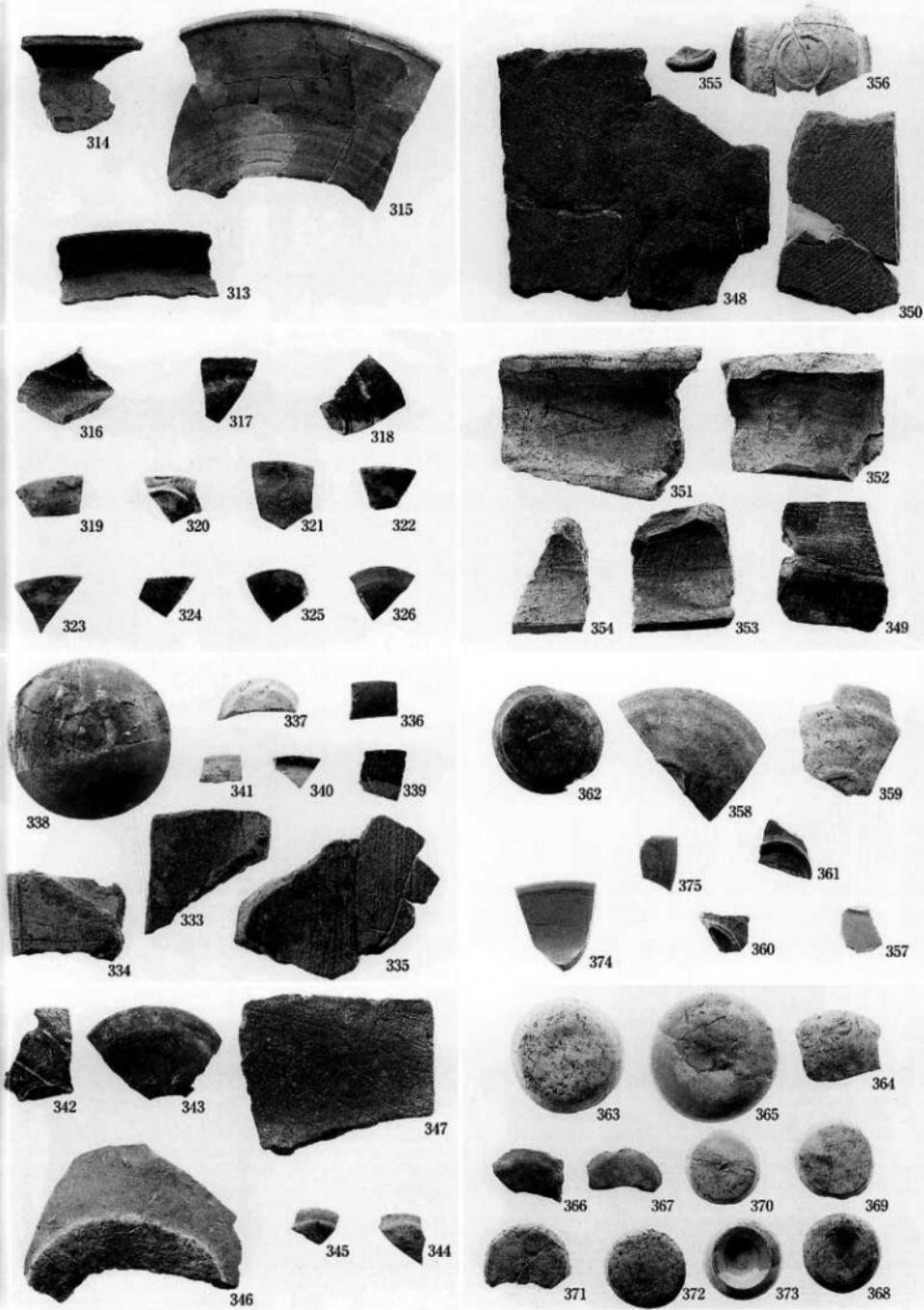


Pit32



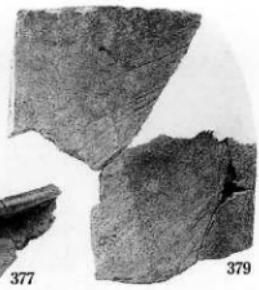
Pit74







378



377

379



392



400



401



402



403



409

404



405



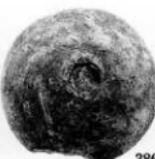
406



407



383



386



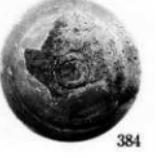
385



389



390



384



391



382



418



423



422



425



420



393



419



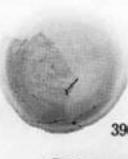
428



427



395



396



381



429



433



398



380



394



430



397



399

報告書抄録

ふりがな	しんでんじいせき	はなしろいせき	はっくつちょうきほうこくしょ					
書名	新伝寺遺跡91-1区・幡代遺跡03-3区発掘調査報告書							
翻訳名	-							
巻次	-							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第43集							
編著者名	河田泰之							
発行機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-0592大阪府泉南市樽井1-1-1 Tel0724-(83) 0001							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
しんでんじいせき 新伝寺遺跡 91-1区	おおさかふせんなんじ 大阪府泉南市 きたの 北野385	27228	S D J	34° 22' 34"	135° 17' 12"	1991年7月29日 1991年11月22日	4609	大規模店舗 新築
はなしろいせき 幡代遺跡 03-3区	おおさかふせんなんじ 大阪府泉南市 はなしろ 幡代44-49- 127-1-129- 130	27228	H T	34° 21' 09"	135° 16' 08"	2003年5月8日 2003年5月30日	400	老人福祉施 設建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
新伝寺遺跡 91-1区	集落	13世紀中頃～ 後半	掘立柱建物・真 蛸壺焼成土坑・ 溝	瓦器・土師器・須 恵器・国産陶器・ 中国製磁器・真蛸 壺・土鍤・軒丸瓦・ 弥生土器・石礫など			<ul style="list-style-type: none"> ・溝で囲まれた宅地 内に2～3棟の掘立 柱建物で構成され る集落を確認 ・真蛸壺の焼成土坑 を確認 	
幡代遺跡 03-3区	集落	13世紀代 近世以降	掘立柱建物・機 列？ 土坑・井戸	瓦器・土師器・須 恵器・国産陶器・ 中国製磁器・真蛸 壺・土鍤・軒平瓦 など			<ul style="list-style-type: none"> ・掘立柱建物1棟と掘 立柱建物2～3棟以 上で構成される集 落を確認 ・灌漑用の石組み井 戸か？ 	

新伝寺遺跡91-1区・幡代遺跡03-3区 発掘調査報告書

泉南市文化財調査報告書 第43集

2004年3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会

泉南市樽井1丁目1番1号

Tel0724-83-0001

印 刷 有 限 会 社 スノタ印刷工房

泉南市新家4509-4, 1-205

Tel0724-80-2760

